

長岡市埋蔵文化財調査報告書

# 岩田原遺跡

—経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015

新潟県長岡市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は新潟県長岡市小国町上岩田字鍛冶田 786 番地 1 ほかで実施した、岩田原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査の原因は、新潟県による経営体育成基盤整備事業上岩田地区である。平成 21・22 年に長岡市教育委員会が試掘・確認調査を行い、本発掘調査は、長岡市教育委員会が長岡地域振興局からの受託事業として実施した。
3. 試掘・確認調査に要した経費は、文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫及び県費の補助金交付を受けた。本発掘調査に要した経費は、原団体である新潟県地域振興局が 95%、残り 5%（農家負担分）を長岡市が負担した。長岡市負担分については、国庫及び県費の補助金交付を受けた。
4. 遺物の註記は以下のとおりである。

遺構覆土出土（個別）　　遺跡略号（ITH）+ 調査年度（14）+ 遺構番号- 個別番号  
遺構覆土出土（一括）　　遺跡略号（ITH）+ 調査年度（14）+ 遺構番号  
包含層出土（個別）　　遺跡略号（ITH）+ 調査年度（14）+ 個別番号  
包含層出土（一括）　　遺跡略号（ITH）+ 調査年度（14）+ 大グリット名

5. 遺構番号は、遺構略号 + 調査区全体の通し番号とした。
6. 遺物の個別番号は、調査区全体の通し番号とした。
7. 遺構平面図は光波測量で作成し、航空写真測量によりこれを補った。遺構断面図は簡易造り方実測（1:10）で作成した。
8. 石器実測図中の ■ はガジリ痕を示す。
9. 本書は本文と巻末図版とで構成される。
10. 執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章 新田康則（長岡市教育委員会）  
第Ⅱ章 石坂圭介（株式会社シン技術コンサル）  
第Ⅲ章 石坂  
第Ⅳ章 1：石坂 2：新田  
第Ⅴ章 1：石坂 2：パリノ・サーヴェイ株式会社  
第Ⅵ章 新田

- なお、編集については石坂が担当し、新田が総括した。
11. 本報告書の内容は先行する全ての報告・記載に優先する。
  12. 調査の体制は以下のとおりである。

（試掘・確認調査）平成 21・22 年度

調査主体　長岡市教育委員会　　教育長 加藤孝博  
事務局　長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋茂人）  
調査担当　長岡市教育委員会科学博物館 主任 新田康則  
(本発掘調査) 平成 26 年度

調査主体　長岡市教育委員会　　教育長 加藤孝博

事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 小熊博史）  
調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 主査 新田康則  
調査員 石坂圭介（株式会社シン技術コンサル）  
現場代理人 伊藤和夫（株式会社シン技術コンサル）  
調査補助員 茨木亜樹子・小川真紀・佐藤美香・渡辺雪子  
発掘作業員 阿部正之・小川源一・小川大二郎・小川政夫・金子貞太郎・河原崎幸一・  
北原良二・小飯塚徳茂・小林 茂・佐藤尚雄・高橋悦夫・高橋一久・高橋哲郎・  
高橋 充・田中康夫・多田忠夫・田中一夫・永井邦男・中村英巳・濁川俊昭・  
深井政由・増茂 有・根津一代・山岸カズイ・山崎政博・渡辺幸雄  
整理作業員 茨木亜樹子・小川真紀・渡辺雪子

13. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なる御教示・御協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

安藤正美・長田友也・木島 勉・高橋久美子・野田豊文・平吹 靖・藤波啓容・山岸洋一  
有限会社アルケーリサーチ・株式会社石塚組・糸魚川市教育委員会・株式会社植木組・  
柏崎市教育委員会・株式会社信濃技術・永井工業株式会社・  
社団法人長岡シルバー人材センター南事務所・同小国事務所・新潟県教育庁文化行政課・  
平野建設株式会社・有限会社北成興業・見附市教育委員会

## 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	2
1 遺跡の位置と地理的環境	2
2 周辺の遺跡	2
第Ⅲ章 調査の方法と経過	5
1 発掘調査の方法と経過	5
2 整理作業の経過	6
第Ⅳ章 調査の成果	7
1 本調査区	7
(1) 検出遺構と出土遺物の概要	7
(2) 基本土層	7
(3) 検出遺構と遺構出土遺物	8
A 検出遺構の分布	8
B 埋設土器	8
C 土坑	8
D ピット	10
E 溝状遺構	11
(4) 遺物の分布	12
(5) 包含層出土遺物	12
A 弥生時代の遺物	12
B 古代の遺物	17
C 中・近世の遺物	17
2 立会調査区	23
第Ⅴ章 自然科学分析	25
1 自然科学分析の概要	25
2 南向き露頭	25
3 岩田原遺跡の自然科学分析	27
(1) はじめに	27
(2) 露頭出土種実・木材および弥生土器の年代	27
A 試料	27
a) 露頭出土種実・木材	27
b) SK2出土土器	27
B 分析方法	27
C 結果および考察	29
(3) 古植生	30

A 試料	30
a) 概要	30
i) Loc. 3	30
ii) 木材試料	32
b) 分析試料	32
B 分析方法	32
a) 花粉分析	32
b) 種実遺体の抽出同定	32
c) 樹種同定	33
C 結果	33
a) 花粉分析	33
b) 種実遺体の抽出・同定花粉分析	33
i) 下部有機質土壌	33
ii) 上部有機質土壌	34
c) 樹種同定	34
D 考察	35
第VI章 まとめ	38
1 はじめに	38
2 遺跡の形成と立地	38
3 遺構と場の利用	38
4 土器群の様相	39
5 遺物の年代	39
引用参考文献	40

## 挿図・表目次

第1図 工区および遺跡範囲・本調査区	1
第2図 遺跡の位置	3
第3図 周辺の遺跡（弥生～古代）	4
第4図 弥生土器の分布	13
第5図 石器の分布	14
第6図 須恵器・土師器の分布	15
第7図 石材の割合	16
第8図 剥片類の長幅比	16
第9図 二次加工剥片の長幅比	16
第10図 使用痕のある剥片の長幅比	16
第11図 立会調査位置図	24
第12図 地点⑤耕部分検出遺構図	24
第13図 遺物実測図	24
第14図 調査区と露頭位置図	26
第15図 観察箇所 (Loc.) と試料採取箇所 (w)	26
第16図 南向き露頭 Loc. 1・2 柱状図	26
第17図 曆年較正結果 ( $1\sigma$ )	29
第18図 西向き露頭 (Loc. 3) の模式柱状図 および試料採取位置	31
第19図 花粉化石群集	35
第1表 周辺の遺跡一覧	4
第2表 作業工程表	6
第3表 埋設土器	18
第4表 土坑	18
第5表 ピット	18
第6表 構造遺構	18
第7表 土器観察表 (1)	19
第8表 土器観察表 (2)	20
第9表 土器観察表 (3)	21
第10表 石器観察表	22
第11表 立会調査出土遺物一覧	23
第12表 放射性炭素年代測定および曆年較正結果	28
第13表 花粉分析結果	34
第14表 微細物分析結果	36
第15表 樹種同定結果	36

## 図版目次

図版1 遺構全体図・土層柱状図
図版2 B区・C区・擴張区遺構全体図
図版3 個別遺構図①
図版4 個別遺構図②
図版5 個別遺構図③
図版6 個別遺構図④
図版7 個別遺構図⑤
図版8 出土遺物図①
図版9 出土遺物図②
図版10 出土遺物図③
図版11 出土遺物図④
図版12 出土遺物図⑤
図版13 出土遺物図⑥

## 写真図版目次

写真図版1 調査写真①
写真図版2 調査写真②
写真図版3 調査写真③
写真図版4 調査写真④
写真図版5 調査写真⑤
写真図版6 調査写真⑥
写真図版7 遺物写真①
写真図版8 遺物写真②
写真図版9 遺物写真③
写真図版10 遺物写真④
写真図版11 遺物写真⑤ (立会調査区)
写真図版12 花粉化石
写真図版13 種実遺体
写真図版14 木材

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯

当該本発掘調査は、経営体育成基盤整備事業（上岩田地区）に伴って実施したものである。この事業に伴う埋蔵文化財の取扱いは平成 20 年 11 月から開始した。事業計画地には延命ヶ原遺跡（縄文前～晩期）・浦田遺跡（平安）・延命寺城跡（中世）が、隣接地には野田遺跡（縄文）・西巻遺跡（古墳）などの遺跡が分布しており、さらに未発見の遺跡が存在する可能性があった。この協議に資するため、長岡市教育員会は試掘・確認調査を実施することとした。

**平成 21 年度試掘・確認調査** 平成 21 年 9 月 28 日付け長教博第 230 号で新潟県教育委員会教育長（以下、県教育長と略す）に文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手を報告し（以下、着手報告と略す）、平成 21 年 10 月 1 日～9 日にかけて調査を実施した。45 箇所でトレンチ調査を行い、その結果によって延命寺ヶ原遺跡の範囲を拡大、さらには延命寺北遺跡の周知化を平成 22 年 1 月 4 日付け長教博第 295 号・第 296 号で県教育長に通知した〔長岡市教委 2010〕。

**平成 22 年度試掘・確認調査** 平成 22 年 9 月 24 日付け長教博第 213 号で県教育長に着手報告を行い、平成 22 年 9 月 29 日～10 月 27 日にかけて調査を実施した。116 箇所でトレンチ調査を行った結果、新たに岩田原遺跡・阿部田遺跡を発見し〔長岡市教委 2011〕、平成 23 年 3 月 2 日付け長教博第 360 号で周知化の手続きをとった。

取扱い協議から本発掘調査着手まで 試掘・確認調査の結果を踏まえて、遺跡範囲内における開発についての取扱い協議を重ね、保護盛土層の設定等によって遺跡がおよそ現状保存される見通しとなった。しかし、岩田原遺跡範囲内において、掘削深度が遺跡深度に到達してしまうことが回避できない部分があり、やむを得ず、この範囲を対象に本発掘調査を実施し、記録として遺跡を保存する方針を固めた。また、工事内容によって本発掘調査実施を要しない範囲についても、全城立会調査を実施することとした。

その後、新潟県長岡地域振興局から平成 26 年 2 月 18 日付け長振農第 3542-1 号で文化財保護法第 94 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の通知がなされ、これに対し、県教育長から平成 26 年 3 月 13 日付け教文第 1479 号の 2 により工事前に発掘調査を実施するよう通知された。

この通知を受け、新潟県長岡地域振興局農林振興部長から市教委教育長に対し、平成 26 年 4 月 9 日付け長振農第 3016 号で岩田原遺跡における本発掘調査の依頼があつた。市教委はこれを受諾し、平成 26 年 5 月 2 日付けで受託契約を締結した。

そして、平成 26 年 6 月 3 日付け長教博 100 号で、県教育長に対し着手報告を行い、本発掘調査を開始した。



第 1 図 工区および遺跡範囲・本調査区 (1:20,000)

## 第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境（第2図・第3図）

本遺跡は、新潟県長岡市の南西部、旧刈羽郡小国町（2005年長岡市と合併）のほぼ中央、上岩田地内に所在する。渋海川からは東へ直線で650m程の地点にあり、標高は約82mを測る。周辺地は、比較的平坦な地形だが、多少の起伏がある。遺跡から渋海川までは10m弱を下る緩斜面となっており、また、北側には渋海川の支流である橋沢川が、南には同じく小国沢川が流れているため、舌状台地のような様相を呈している。調査区付近（中でもB区）は、その頂部に当たる。調査区は、上岩田集落から国道404号線を挟んで北西に位置し、現況は水田であった。

遺跡周辺は、東を閑田山脈、西を八石山脈に囲まれ、渋海川沿いに帯状に形成された盆地地形をなす。急峻な山の迫った左岸に比べ、右岸ではしばしば平坦面に恵まれ、東へ向けて階段状に発達した河岸段丘が見られる。地形分類図（鈴木1988）によれば、延命寺ヶ原遺跡〔小国町教委 1969〕のる面は砂礫段丘「Gt IV」に、上岩田集落付近は同「Gt VII」に、遺跡周辺は最下位の同「Gt VIII」に区分されている（註1）。この区分を裏付けるように、平成22年度の試掘調査では、集落南方の水田面で黄褐色風化火山灰土層を確認し、本遺跡のる面では明青灰色シルト～粘土層を確認している〔長岡市教委 2011〕。のことから当地は完新世に形成された段丘面とすることができる。

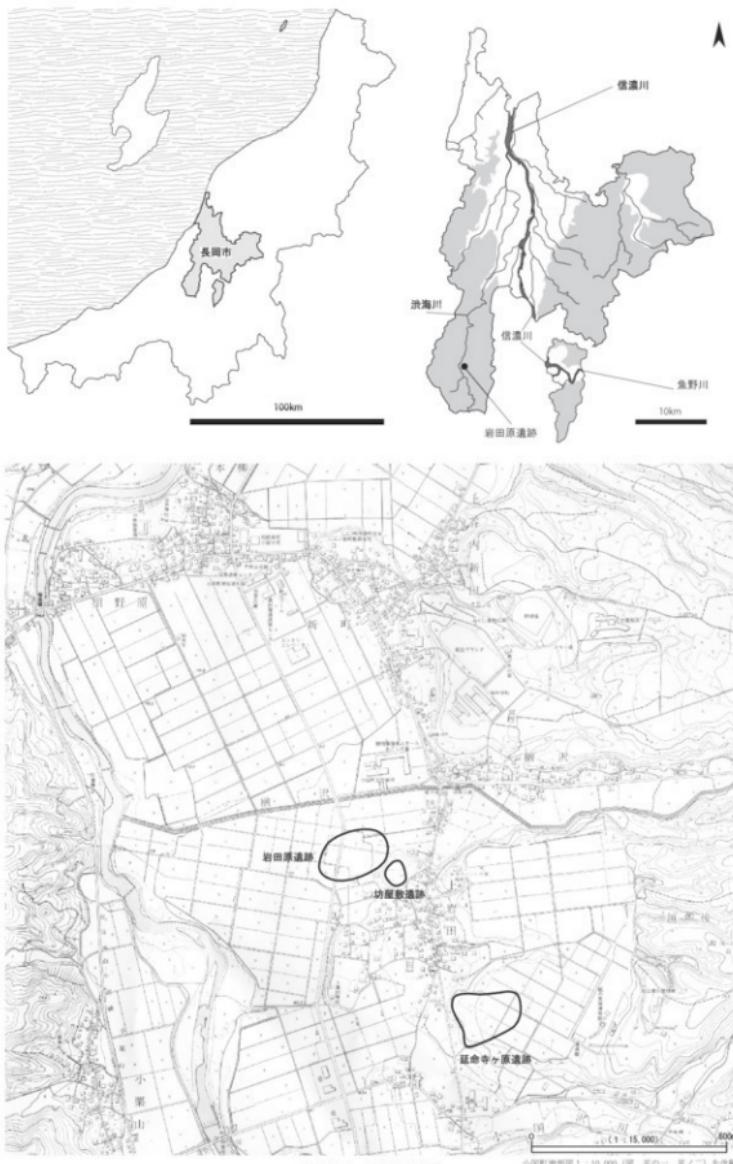
今回、調査区西方に削出されていた露頭を調査する機会に恵まれ、当段丘面の形成年代を知る手がかりを得た。詳細は第V章に譲るが、地山層（IV層）下に有機質土壤が2枚観察され、このうち上部有機質土壤から採取した試料の年代を測定した結果、約2,400年前（曆年較正年代 $2,399 \pm 25$ yrBP）という値が出た。これは縄文時代晚期後半に相当し、延命寺ヶ原遺跡に晚期集落が営まれた時期には、岩田原遺跡周辺は完全に離れていない可能性があることが示された。そして弥生時代中期後葉という時期になって遺跡が営まれ始めるようになったのである。

### 2 周辺の遺跡（第3図）

第3図には遺跡周辺における弥生時代および古代の遺跡位置を示した。古墳時代の遺跡は、現在のところ知られていない。

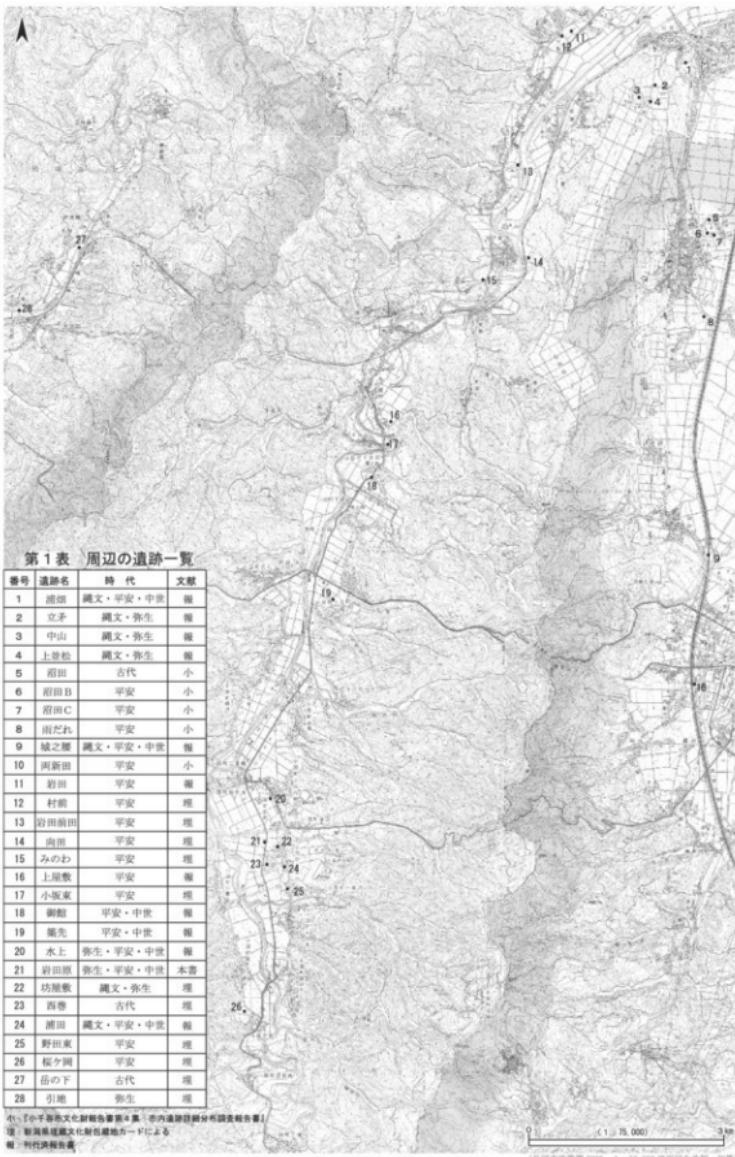
弥生時代の遺跡では、立矛遺跡（2）、中山遺跡（3）、上並松遺跡（4）、水上遺跡（20）、引地遺跡（28）が知られる。立矛遺跡は、弥生時代前期の水神平系土器が出土したことで著名であったが〔渡辺 1999〕、平成23年（2011）に発掘調査を実施し、小松式、栗林式、宇津ノ台式、砂山式など、中～後期の土器が出土した。中でも砂山式の出土は、長岡市南部では初例となる。さらに今回の調査で、その分布範囲がより南へ広がっていたことが判明した。水上遺跡は、平成15年（2003）の調査で、旧小国町域で初めて弥生土器が出土した遺跡である。中期後半の栗林式と小松式が報告されているが、一部の甕には宇津ノ台式の影響があるとする見解もある〔兼澤 2009〕。

平安時代の遺跡も、徐々にではあるものの、周知化が進んでいる。岩田遺跡（11）、上屋敷遺跡（16）、御館遺跡（18）、築先遺跡（19）、水上遺跡（20）、浦田遺跡（24）では発掘調査も行われている。岩田遺跡が9世紀前半に遡るほかは、9世紀後半～10世紀前葉の遺跡が多い。これは、渋海川中・下流域における開発時期を反映していると考えられる。



第2図 遺跡の位置

小国町地形図 1:10,000 (図 共の一、共ノ二) を改編



第3図 周辺の遺跡（弥生～古代）

## 第Ⅲ章 調査の方法と経過

### 1 発掘調査の方法と経過

発掘調査の方法 調査に先立ち調査区の長軸方向（南北）に沿って  $10\text{ m} \times 10\text{ m}$  の大グリッドと  $2\text{ m} \times 2\text{ m}$  の小グリッドを設定した（図版1）。各グリッドの呼称については、北西端を原点とし、大グリッドは北から南へ向かってアラビア数字の1、2～11を、西から東へ向かってアルファベットのA～Cを振り当てた。小グリッドについても、北西端から東へ1～5、一段南に降りて西から東へ6～10などとして、25までを振った。また、調査区内を着手順に調査区A～C、拡張区などと呼び分けた。

表土剥ぎは、バックホーによるすき剥ぎで行い、基本的に調査区西側の排土置き場に搬出した。遺物包含層及び遺構覆土は、ジョレンや移植ゴテ、ネジリガマなどを用いた人力作業によって掘削した。掘削土は、ベルトコンベアで調査区西側の排土置き場に運搬した。

遺物の出土位置は、原則として光波測量によって記録した。ただし、近世以降の遺物に関してはこの限りではない。また、掘削に際して原位置が不明となった遺物についても、グリッド単位や遺構単位で取り上げた。遺構平面図も光波測量で作成した。基本土層と各遺構の土層断面図も簡易やり方実測で記録した。その際の実測図の縮尺は、1 : 10を原則とした。

記録写真の撮影はキヤノン Eos - Kiss シリーズを2台用い、モノクロフィルムとデジタルデータ（JPEG形式）で記録した。航空写真については、ラジコンヘリに一眼レフカメラ・デジタル一眼レフカメラを搭載し、リバーサルフィルムとデジタルデータ（JPEG形式）で撮影した。

発掘調査の経過 平成26年5月31日より鉄板や重機の搬入を開始した。6月9日までにベルトコンベアー・休憩小屋・事務所・機材小屋等を搬入し、工事看板等を設置した。また、6月4日より表土剥ぎを開始。A区北端から始め、順次南側へ進んだ。5日には、B区南端で排水用のサブトレーンチを人力にて掘削中に弥生土器片が出土した。これは埋設土器（UG1）の一部であった。

6月9日に安全教育を兼ねた説明会を現地で実施し、翌10日から本格的な発掘調査に着手。原則としてA区を先行させ同区終了後に、B区へと進んだ。包含層の掘削、遺物の検出と取り上げ、遺構確認等の作業等をほぼ同時進行で行った。A区では、1基の溝状遺構と少数のピットを検出したのみで、遺物の出土もごく少数であり、6月24日にはほぼ調査を終了した。

この間、は場整備工事の進捗により、A区とB区の間を流れていた農業用水が止まり、この部分の調査が可能となった。ここを便宜的にC区と呼称し、6月26日に表土剥ぎを行い、以降B区と並行して調査を進めた。A区同様、遺構がほとんど確認されず、遺物も少量であった。C区の調査は7月7日に終了した。

B区のうち、国道に面した東側では、包含層が既に削除され残っておらず、IV層（地山）上面で遺構を検出した。P9では炭化物・弥生土器・石器の集中が見られた。掘り込みは確認できなかつたが、浅い土坑墓の可能性が考えられた。また、B区南端でも埋設土器（UG1）や溝状遺構（SD3）を検出した。他方、B区の中央から西側ではII・III層が残在し、ここから若干の遺物が出土した。特筆すべきはB8-2グリッドから出土した勾玉である。これは溝状遺構SD2の範囲にあたるが、SD2確認以前のIII層中から出土したものである。調査が進むに連れ、中央部や西側でも遺構が確認されるようになり、調査区を横断するSD2や、略円形の平面形態を持つSK2・SK3を検出した。SK2・SK3は浅い土坑であり、弥生土器・石器類が集中して出土していることから、墓坑と推測された。

B区南端では埋設土器と溝状遺構を検出、これが竪穴住居跡である可能性があったため、事業者と協議の上、7月7日から調査区を南に拡張した（拡張区）。結果、溝状遺構は断続的に延伸するものの、L字状に屈曲して終結し、竪穴住居跡の検出には至らなかった。また、周辺での新たな埋設土器の検出もなく、遺構・遺物の検出も僅少であった。

雨にたられながらも、7月16日までに遺構の調査をほぼ終了した。天候の回復を待って22日に全体精査を行い、同日正午から航空写真撮影を実施した。機材等搬出後28日から、調査区北端の農道部分の調査を行い、30日に調査区における全業務を完了し、現場の引き渡しを行った。さらに、調査区西方に良好な露頭が削出されていたため、8月19・20日に露頭の観察・試料採取・測量などを実施した。

## 2 整理作業の経過

整理作業は7月28日より開始した。同日より遺物の洗浄、写真及び図面整理等を開始し、前者は8月5日に終了し、後者は断続的に9月16日まで行った。8月6日からは遺物の注記作業を、8月11日からは土器の接合、復元作業を開始し、それぞれ8月28日までと9月19日までに終了した。また、これと並行して遺物の基本分類と抽出、基礎的な計測とデータ入力などを行った。

遺物の図化作業は、9月16日から取り掛かり、11月26日までかけて完了した。土器・石器とも写真実測によりデジタルで図化を行ったが、土器の断面図や拓影等一部の作業は手取りで行った。図化作業終了直後の11月27日から遺物観察表の作成に取りかかり、12月2日に完了。遺物の写真撮影及び加工は、10月21日から11月5日までの間に行なった。遺構全体図は、素図が9月9日に出来上がり、これに修正を加え10月22日に完成した。遺構個別図は、遺構全体図のデータを元に、現地で手取りした土層断面図と合成して作成した。遺物分布図も、遺物出土位置のデータと遺構の平面図、断面図等をパソコン上で合成、作成した。遺構個別図は10月21日から30日までの間に、遺物分布図は12月2日に素図が出来上がりこれを編集して12月11日に完成させた。遺構観察表は11月12日から始め12月3日までに作成した。

これら遺構全体図・遺構個別図・遺物実測図を元に、12月3日から本格的に遺構図版・遺物図版の編集作業を開始した。これに写真図版の編集も加え、12月23日までに完了した。

本文の執筆は12月11日より本格的に開始し、翌平成27年1月28日までを要した。これと並行して1月13日から全体の編集作業も開始し、1月29日に終了。1月31日に全ての原稿を整え印刷所に入稿した。

第2表 作業工程表

	平成26年							平成27年
	6	7	8	9	10	11	12	
地上調査	■							
発掘		■	■	■	■			
測量			■					
航空写真				■				
調査観察								
遺物洗浄			■					
図面・写真整理				■	■			
目録					■			
土器接合・復元					■			
遺物図化						■		
遺構全体図作成						■		
遺構個別図作成						■		
遺物分布図作成							■	
遺構範囲図作成							■	
遺物観察表作成								■
遺物写真撮影								■
図版作成								■
執筆・編集								■

## 第IV章 調査の成果

### 1 本調査区

#### (1) 検出出遺構と出土遺物の概要

本調査区から、119基の遺構が検出され、915点の遺物が出土した。遺物、遺構ともB区からの検出量が多く、拡張区がこれに次ぎ、A・C区では少なかった。

種別ごとの遺構数は、埋設土器1基、土坑4基、ピット111基、溝状遺構3基である。

出土遺物では、半数以上を土器類が占め602点、石器は290点であり、その他15点であった。土器類では弥生土器が多く183点、次いで土師器132点、須恵器32点、珠洲焼8点であり、中・近世の陶磁器類が247点であった。その他に分類したものは、窯業片と思われるもの1点、古銭5点（北宋錢及び寛永通宝）、煙管4点、柱材・木片5点である。

弥生土器は小破片が大半を占め、時期の分かることは一部に限られた。これらを本稿ではⅠ群：弥生時代中期後葉に比定されるもの（5点）、Ⅱ群：弥生時代後期前葉のもの（11点）とし、残りをⅢ群：時期の判然としないもの（167点）と分類した。器種は、壺・甕・鉢が確認される。須恵器・土師器はおよそ9世紀後半のものと考えられ、いずれも壺類・壺類で占められる。珠洲焼には、壺類・片口鉢類が認められた。中・近世の陶磁器類は、16世紀後半に遡る伊万里焼、唐津焼、瀬戸焼が少数ずつ出土したほか、18世紀中頃以降の肥前系を中心とする陶磁器片が多数出土した。

石器の器種ごとの内訳は、石鎚2点・石鎚未製品2点・石槍未製品1点・石錐1点・剥片類263点・石核11点、および勾玉1点である。このほか、遺構出土の礫9点を遺物として認定した。

#### (2) 基本土層

A区西壁、B区東壁を中心に、8箇所の土層堆積状況を記録した（図版1：基本土層①～⑧）。このうち柱状図③において比較的良好な堆積状況が認められたため、これを中心に調査区の堆積状況を説明する。

##### I層 表土層（現耕作土）

II層 紅褐色土層（10YR4/1）。粘性は〈2〉、しまりは〈3〉である（註2）。耕作土下に堆積し、炭化物、礫を少量含む。遺物を包含する。

III層 灰黄褐色土層（10YR5/2）。粘性は〈3〉、しまりは〈3〉である。IV層ブロック・炭化物粒子を微量、小礫を少量含む。遺物包含層である。

IV層 青灰色土層（10G6/1）。粘性は〈2〉、しまりは〈2〉である。河川由来の堆積層である。地山層。

II層は調査区全体に比較的安定して見られたが、B区東端付近では残存していなかった（柱状図⑤～⑦）。これは、この付近の標高が相対的に高く、前回のは場整備の際に削平されてしまったためであろう。III層はII層に比べて色調が明るい層で、混入物が多い。A区の一部に見られたほか、B区の中央付近でやや厚く堆積し、柱状図⑧付近でも僅かに観察された。分布に不安定さがあることから、II層のバリエーションとも考えられる。IV層は、青灰色シルト層を基本とするが、非常に変異に富む層であり、僅かな地点差やレベル差で顔付きが変わる。ある部分（レベル）では粒径が粗く砂状をなし、ある部分では粒径が細かく粘質を帯びている。ほかに炭化物や植物遺存体を多量に含む箇所もある。しかしながら、河川堆積物であることでは共通し、砂・シルト・粘土の変化にも連続性と反復性が認められた。

### (3) 検出遺構と遺構出土遺物

#### A 検出遺構の分布（図版1・2）

既に述べたように、今回の調査区内ではB区で多くの遺構が検出された。B区では埋設土器・土坑・ピット・溝状遺構が発見されており、遺構の種類も多い。これら遺構の一部からは、遺物のまとまった出土も見られた。しがて、B区が遺跡の中心に当たるものと解される。これは地形的な条件、すなわちB区南側のB 9～10 グリッド付近の標高が、周辺では最も高い場所にあたっていることと関連があるだろう。また、溝状遺構のS D 2 の北側で少なく、南側で多いという傾向も顕著である。これは人為的な要因も想起することができる。

#### B 埋設土器（図版3）

UG 1（図版3） B区南端のB 11-5 グリッド（以下、グリッドを省略する）で検出した。Ⅲ層中で確認され、一部はⅣ層中に埋められた状態であった。埋設状態は正位で、底部から胴部半ばまで遺存していた。周囲はⅢ層がわずかに残り、その直上にⅠ層（耕作土）の堆積が見られた。そのⅢ層の残存レベルと本埋設土器の残存レベルとが一致したことから、胴部より上位の部分は、前回のは場整備の際に失われたものと考えられる。また、埋設土器の底部内側に貼り付くように口縁部破片が出土した。使用原体・胎土・焼成などの特徴から、埋設土器と同一個体であると判断した。土器内部の覆土は、Ⅳ層土ブロックが平行ラミナ状に認められることから、人為的な埋土と推定される。したがって、口縁部破片は埋設時に崩落したものであろう。また、土器内部の覆土を持ち帰り水洗選別を行ったが、小礫がわずか（12.4g）に検出されたのみであった。

1（図版8）は、弥生時代後期初頭の壺である。底部から胴部半ばに向け大きく開き、口縁部は内湾気味に開く。底径は7.2cm、残在する胴部最大径は28.2cm、器高18.7cmを測る。図上復元により、口縁部径23.5cm、器高37.0cmを推計する。口縁部と胴部には、直前段反撃りRRの縋文が施されている。口縁部には、端部に小突起と沈線がみられ、小突起頂部には刺突が2箇所付けられている。この小突起の単位は不明である。また、口縁部上端には平行沈線文が引かれ、その間に交互刺突文が施される。これら土器の形態や小突起、そして交互刺突文などの特徴から砂山式（II群）に帰属するものと考えられる（註3）。遺存状態が悪く、調整痕などは観察できないが、胴部下半には被熱のためと考えられる器面の荒れが目立ち、一部には黒斑が認められた。

#### C 土坑（図版3～4）

P 9（図版3） B区C 10-1で検出した炭化物分布範囲である。掘り込みは確認できなかったが、遺物がまとまって出土しており、本来は、後述のSK 2やSK 3などと同様の浅い土坑（墓穴）であったと推測される。炭化物は粒径の細かいものが多く、長径96cm、短径84cm、深さ8cmの範囲にやや散漫に散布しており、この中の狭い範囲に、弥生土器片・石鏸・礫などがまとまって出土した。礫は3点含まれ、炭化物範囲のはば中央に、同一レベルで分布した。大きいものから最大長14cm、10cm、4cmを測る。図版8-4に示した土器や、15のアメリカ式石鏸は礫の直下から出土したものである。出土土器は小破片が多く、必ずしも良好な保存状態とは言えないが、概ね同一レベルから出土している。この出土状態は、一定のまとまりとして評価できるだろう。なお、遺物周辺の土壤を持ち帰り水洗選別を行ったが、小礫と炭化物が

わずか2.0gが検出されたのみであった。

遺物は42点が出土しており、内訳は弥生土器31点・石器1点・石器未製品1点・剥片6点・礫3点である。15点を図化した(図版8)。2は、わずかに内湾する口縁部資料で、壺と推定した。口縁部端部に刻目があり、口縁部外面の上端にそれぞれ一本描き沈線による平行沈線文が引かれている。内面側は、一部3本の部分がある。この沈線に先んじて、口縁部外面にはRL繩文が施されている。II群と判断した。3も口縁部破片資料で、外反する壺と推測した。口縁部外面上端をつぶすように連続押圧している。4は胴部の小破片で、斜位繩文を施した後に沈線を描いている。沈線は、横位の平行沈線とこれを縦位に結ぶような弧状の沈線文である。II群の鉢であろう。5はやや厚手の破片で、外面には刺突と沈線が見られる。内面には横方向のナデ(註4)が観察できる。II群であろうか。6、7も小破片であり、RL繩文のみが認められる。8にも斜位繩文が観察されるが遺存状態が悪く原体は不明である。9にもやや粗い繩文が見られるが、原体は不明。11～13は無文の胴部破片である。11と13は硬く焼きしまり、内面に線状の調整痕が見られるという共通項から、同一個体の可能性がある。12は、両者に比べると胎土も粗く、焼成も軟質である。14は底部付近資料で、楕であろうか。焼成は軟質である。15は頁岩製のアメリカ式石器である。基部は抉ったような加工が施される。16は頁岩製で、表裏両面に尖頭形に整形するための平坦剥離が施されている。石器未製品であろう。

S K 1(図版3) B区A 9-15で検出した土坑である。平面形態は不整梢円形で、西側にU字形の段をもつ。断面形態はU字形である。長径は184cm、短径は112cm、確認面から底面までの深さは42cmであった。S K 2、S K 3と比べると深く、底面が平坦でない。弥生土器が1点出土したが、小破片のため図化していない。

S K 2(図版3) B区A 10-4-9で検出した土坑である。平面形態は略円形を呈し、北側に狭い段を有する。断面形態は皿状で、底面は水平で平坦に整えられていた。長径は残在値で172cm、短径は148cm、確認面から底面までの深さは16cmと浅い。東端でS K 3に接し、これによって切られている。なお、覆土の一部を水洗選別したが、小礫、チップ、土器片等90.1gが検出されたのみであった。

遺物は31点が出土しており、内訳は弥生土器26点・石器剥片5点である。11点を図化した(図版8～9)。17は、わずかに内湾する口縁部資料で、壺であろうか。口縁部上端にはLR繩文の横回転施文が見られ、その下の屈曲部に平行沈線が引かれている。この平行沈線は2本同時施工であろう。18も内湾気味の口縁部資料である。やはり壺であろう。斜位繩文が観察されるが、器面が荒れており、原体を判読できない。口縁部上端に2本同時の平行沈線が引かれる。屈曲する頸部にも横位沈線が残っている。19は、I群・宇津ノ台式の壺であろう。口縁部下の胴部上半の破片と解した。胎土はやや粗く混入物も大きいが、硬く焼きしまった器面にくっきりとした沈線で文様が描かれている。所謂重菱形文であり、斜位・横位・弧状を幾段も重ねている。外面にオコゲが厚く付着しており、AMS年代測定を行った結果、暦年較正年代2,052±26yrBPという数値を得ている(分析の詳細は第V章3参照)。20も19に類似した資料で、I群の壺もしくは壺であろう。湾曲した胴部から外反する頸部付近の資料と考えられる。19と比べて浅く細い沈線で横位沈線文と重菱形文とを重ね、反復させている。21は胴部下半から底部にかけての資料である。器種は不明で、文様も見られない。内外面にスス・オコゲが付着しているほか、破断面にもススの付着が顕著である。22にはRL繩文が見られ、23には外面に縦方向のナデ(註5)が認められる。24は文様が不鮮明である。湾曲する形態から鉢と捉えた。25は底部資料で器種は不明である。26・27は頁岩製の二次加工剥片である。26は剥片末端が折れしており、裏面の左右両側縁に二次加工が施される。27では、正面左側縁の凸部に連続する剥離がみられ、この部分の裏面には若干の磨耗痕がみられる。さらに、打面部を除く周縁に不連続の

剥離が残され、特に、緩やかに内済する剥片末端部に顕著である。

S K 3 (図版4) B区A 10-5・10で検出した土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し東側にやや深い部分を有する。断面形態は皿状だが、SK 2と比べて底面に傾斜がある。長径は130cm、短径は108cm、確認面から底面までの深さは18cmであった。本道構は西端でSK 2と接し、これを切る。なお、覆土の土壤を持ち帰り水洗選別を行ったが、大半は小礫で僅かに炭化物と土器が混入した(268.9 g)。

遺物は8点出土した。内訳は弥生土器6点・剥片2点である。このうち土器3点・剥片1点を国化した(図版9)。28は厚手の土器で、R L 繩文が施されている。外面には薄くススの付着がみられる。29も厚手の破片資料である。L R 繩文の回転方向を縦・横に変えている。30は繩文が施されているが、原体は不明である。31は頁岩製の二次加工剥片である。縦長剥片の左右無縁に二次加工が施されている。

#### D ピット(図版4~6)

P 1 (図版4) A区C 3-11で検出した。平面形態は不整楕円形、断面形態は弓状である。長径は168cm、短径は134cm、確認面から底面までの深さは25cmであった。東側にはやや深い掘り込み部分がある。炭化物を多く含む層(③層)を有した。出土遺物もなく、性格不明である。

P 2 (図版4) A区C 3-12で検出した。平面形態は楕円形、断面形態はU字状である。長径38cm、短径32cm、確認面から底面までの深さは10cmであった。遺物は出土していない。

P 5 (図版4) A区C 6-6で検出した。平面形態は楕円形、断面形態は弓状である。長径は38cm、短径は28cm、確認面から底面までの深さは11cmであった。出土遺物はない。

P 6 (図版4) A区C 6-11で検出した。平面形態は楕円形、断面形態は漏斗状である。長径34cm、短径27cm、確認面から底面までの深さは18cmであった。杉材の柱と根固石が残っていた。根固石は6点で、長軸6cm~125cm、重量162g~500gまでの偏差があった。柱の太さは径7cmと細い。簡素な掘立柱建物の柱穴と推測されるが、周辺に類似するピットを検出できず、配列を把握できなかった。柱材・根固石以外の出土遺物はなかった。

P 8 (図版4) B区C 8-11で検出した。平面形態は不整円形、断面形態は不整な箱状である。長径は50cm、短径は48cm、確認面から底面までの深さは20cmであった。出土遺物はない。

P 11 (図版5) B区B 10-11で検出した。平面形態は不整円形、断面形態は箱状である。長径は53cm、短径は44cm、確認面から底面までの深さは13cmである。柱穴であろう。遺物は弥生土器が2点、剥片が2点出土したが、国化はしていない。

P 15 (図版4) B区A 10-5、SK 3の北東で検出した。SK 3を切る。平面形態は略方形、断面形態は皿状である。長径は48cm、短径は39cm、確認面から底面までの深さは9cmであった。出土遺物はない。

P 16 (図版5) B区A 10-5で検出した。平面形態は楕円形、断面形態は弓状である。長径46cm、短径32cm、確認面から底面までの深さは8cmである。弥生土器と土師器が各1点出土しているが、細片であり、混入の可能性が高い。国化はしていない。

P 18 (図版5) B区A 10-10で検出した。平面形態は不整楕円形、断面形態は弓状である。長径は76cm、短径は61cm、確認面から底面までの深さは16cmであった。遺物は出土していない。

P 22 (図版5) B区B 10-11で検出した。平面形態は楕円形、断面形態は皿状である。長径は49cm、短径は36cm、確認面から底面までの深さは6cmであった。弥生土器2点・須恵器無台环1点・土師器2点・使用痕のある剥片1点が出土した。このうち弥生土器1点を国化した(図版9)。32は弥生土器の小破片である。

縄文のような痕跡があるが、原体は不明である。

P 23 (図版5) B区B 10-11・16で検出した。平面形態は略方形、断面形態は階段状である。長径は79cm、短辺は60cm、確認面から底面までの深さは30cmであった。柱穴であろう。使用痕のある剥片が出土しているが、國化には至っていない。

P 24 (図版5) B区B 10-16で検出した。平面形態は略円形、断面形態はU字状である。長径は39cm、短径は35cm、確認面から底面までの深さは11cmであった。遺物は出土していない。

P 26 (図版5) 拡張区B 11-25で検出した。平面形態は楕円形、断面形態は弓状である。長径は103cm、短径は73cm、確認面から底面までの深さは31cmであった。遺物は出土していない。

P 27 (図版5) B区C 11-1で検出した。平面形態は楕円形、断面形態は階段状である。長径は44cm、短径は36cm、確認面から底面までの深さは18cm。柱穴の可能性が高い。弥生土器1点・土師器5点が出土している。いずれも小破片であったが、1点を國化した(図版13)。69は土師器の甌である。外面に平行タタキ、内面に同心円タタキが認められる。

P 29 A・B (図版5) B区B 10-7で検出した。P 29 BがP 29 Aを切っている。P 29 Aは平面形態が不整円形、断面形態がU字状で、長径は40cm、短径は32cm、確認面から底面までの深さは12cmであった。P 29 Bは平面形態が不整楕円形、断面形態はU字状で、長径24cm、短径14cm、確認面から底面までの深さ6cmであった。いずれからも遺物は出土していない。

P 32 (図版5) B区B 10-8で検出した。平面形態は不整楕円形、断面形態は階段状である。長径は54cm、短径は41cmで、確認面から底面までの深さは26cmであった。柱穴であろう。遺物は出土していない。

P 37 (図版5) B区B 10-17で検出した。平面形は略円形、断面形はU字状である。長径は45cm、短径は41cm、確認面から底面までの深さは12cmであった。柱穴の残痕であろうか。剥片1点が出土しているが、國化していない。

P 38 (図版6) 拡張区C 11-16で検出した。平面形態は不整楕円形、断面形態は箱状である。長径は104cm、短径は45cmで、確認面から底面までの深さは25cmであった。遺物も出土しておらず、性格不明である。

P 39 (図版6) B区A 10-14で検出した。平面形態は楕円形、断面形態は弓状である。西側は調査区外にあたり、完掘していない。確認したかぎりでの長径は48cm、短径は58cm、確認面から底面までの深さは17cmである。土師器が1点出土したもの、小破片のため國化しなかった。

P 40 (図版6) B区A 10-14で検出した。平面形態は略円形、断面形態はU字状である。長径は41cm、短径は35cm、確認面から底面までの深さは26cmであった。柱穴であろう。二次加工のある剥片が1点出土している(図版9)。33は頁岩製の二次加工剥片である。素材剥片の打面側と左側縁に急角度の剥離が施され、末端辺には微細剥離痕が確認される。

P 42 (図版6) B区B 10-21で検出した。平面形態は円形、断面形態はU字状である。長径は34cm、短径は32cm、確認面から底面までの深さは15cmであった。柱穴であろうか。珠洲焼が1点出土しているが、小破片のため國化はしていない。

P 44 (図版6) B区A 9-9で発見されたピットである。平面形態は不整楕円形、断面形態は階段状である。長径は64cm、短径は42cm、確認面から底面までの深さは16cmであった。遺物は出土していない。

#### E 溝状遺構 (図版6～7)

S D 1 (図版6) A区B・C 5・6で検出した。東西に直線的に伸びており、底面は東が高く、西が低い。

断面形態は不整な箱状で、確認面から底面までの深さは39cmであった。遺物は出土していない。

**S D 2**（図版7）B区のはば中央を横断する。南東から北西に向けて緩やかに蛇行しながら伸びている。断面形態は箱状で、幅は平均値で87cm。確認面から底面までの深さは39cmあったが、B 9-8付近では階段状を呈してながら深くなっている、この部分の深さは約49cmであった。弥生土器2点・土師器1点が出土しているが、いずれも小破片であり図化しなかった。

**S D 3**（図版6）B区南から拡張区にかけてL字状に伸びる溝状遺構である。南側では断続的に残存していた。断面形態は弓状である。幅は平均値で56cm、確認面から底面までの深さは9cmと浅い。弥生土器1点・土師器3点（無台环2点）・剥片1点が出土しているものの、いずれも小破片で図化していない。

#### （4）遺物の分布

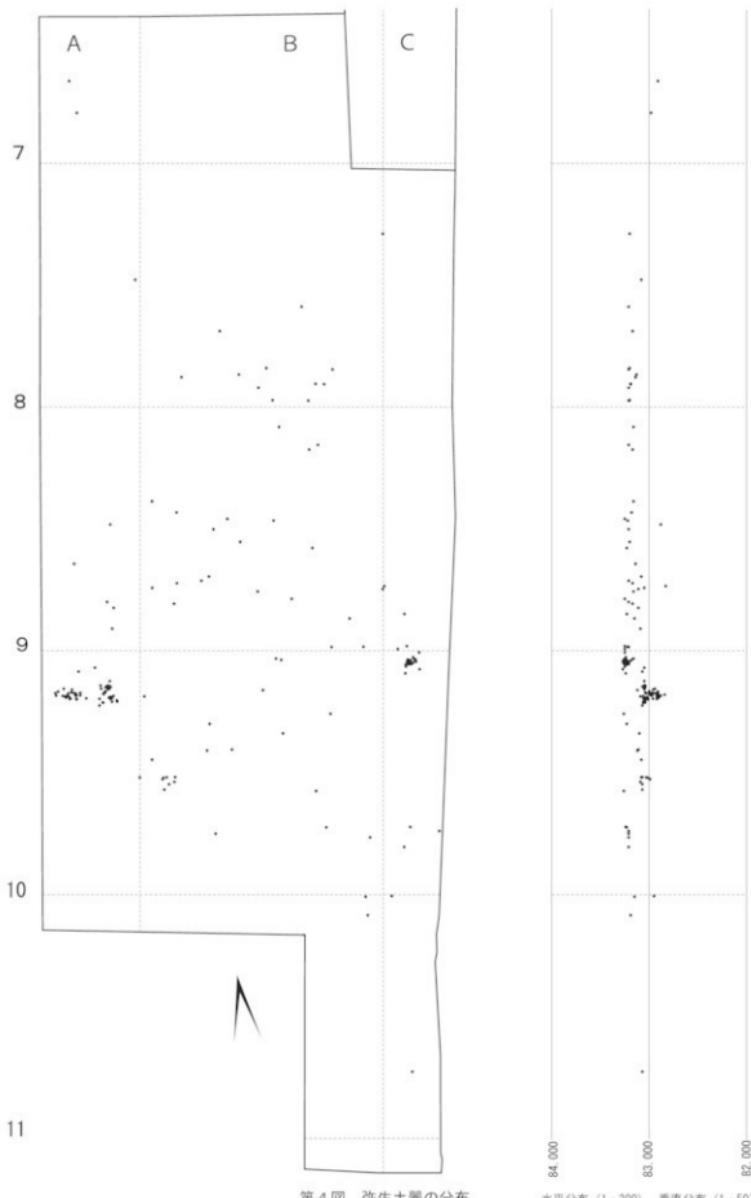
遺構出土遺物を含めた遺物全般の分布状況について概観する。第4図、第5図、第6図には、それぞれ弥生土器・石器・須恵器・土師器の分布を示した。

弥生土器の分布を示した第4図からは、一部の遺構の分布との強い相関関係がうかがえる。A 9北側とC 9北側に集中があるが、前者はSK 2・SK 3、後者はP 9の位置と対応している。この遺構出土遺物による密集を除くと、弥生土器の分布は散漫である。分布はSD 2よりも北側へも広がるが、10m以上離れるとほぼ見られなくなる。石器の分布を示した第5図からも同様な傾向が読み取れる。ただし、上記の土坑への偏りは顕著でない。だが、他の遺構を含めた遺構密度との相関関係はやはり強く、SD 2からある程度離れると出土量が減少する。須恵器・土師器については、7ラインや11ラインからも出土しているなど、石器よりもさらに散漫な分布状況が指摘できる（第6図）。

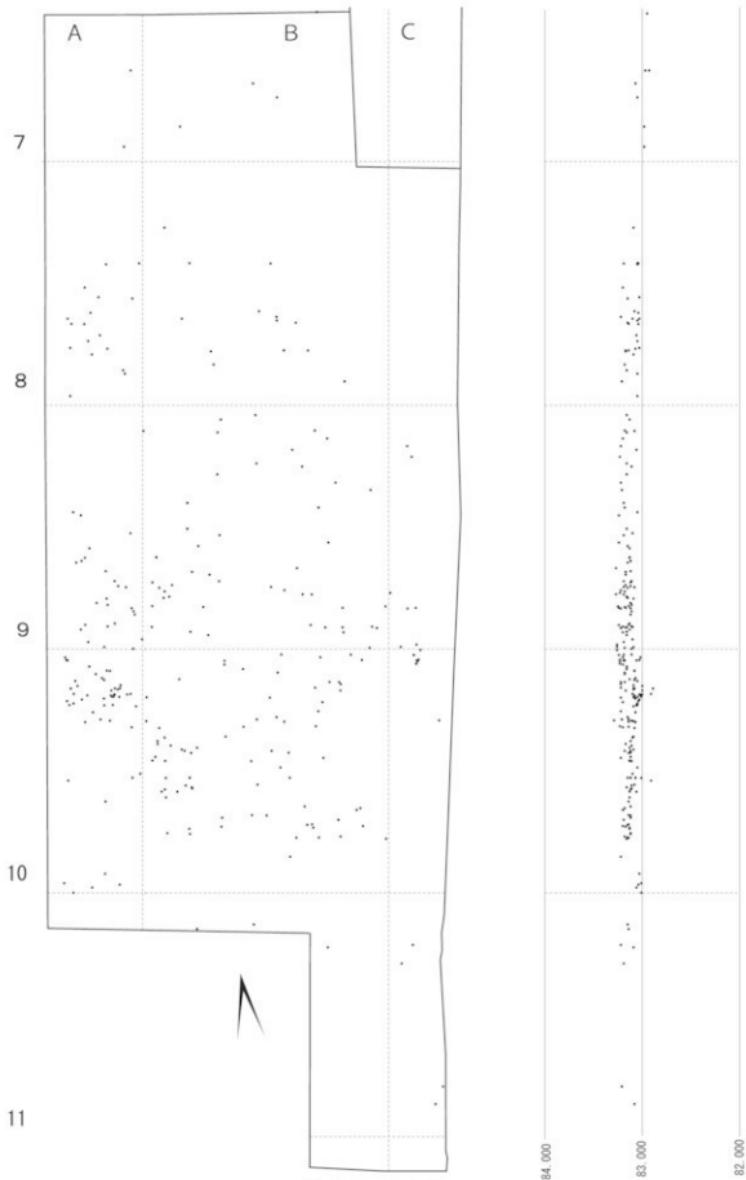
#### （5）包含層出土遺物

##### A 弥生時代の遺物（図版9～12）

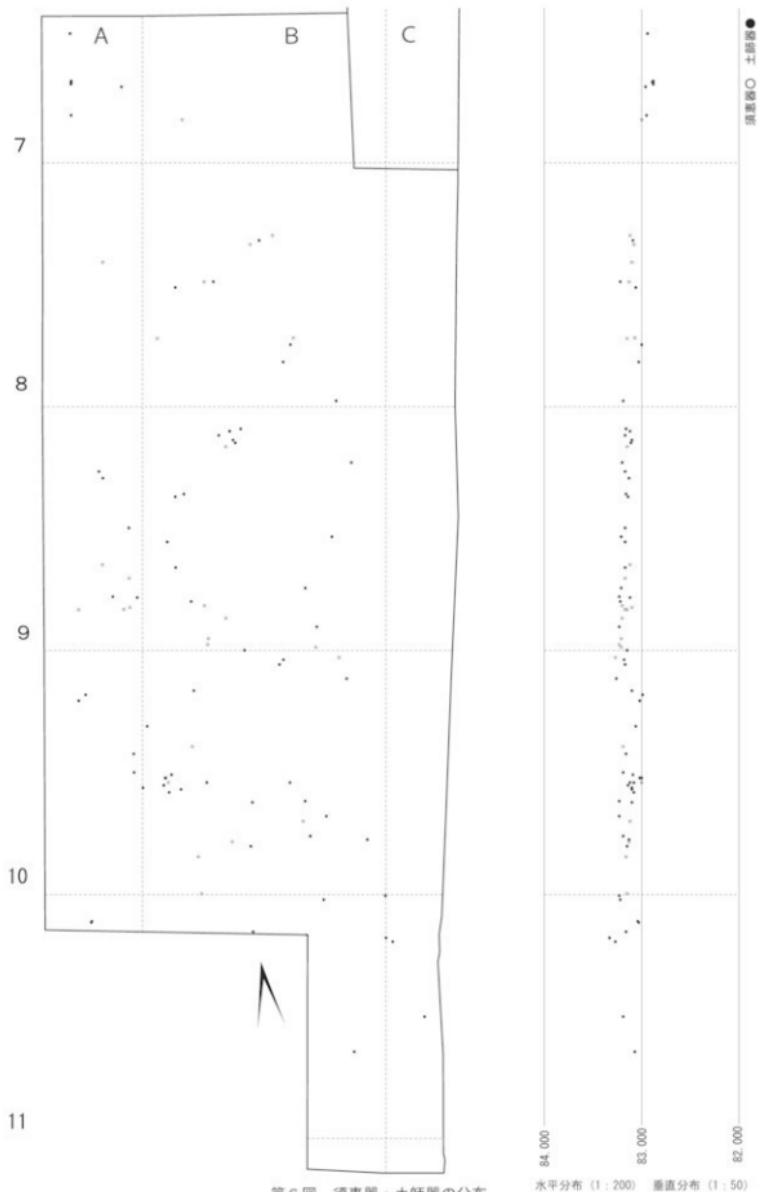
土器 35・36はI群に属する。器厚・胎土・焼成・沈線等の特徴が、SK 2出土の19とやや近似しており、特に35は、横位や弧状の沈線文を描く点も似ている。屈曲部から下に無文部があり、こちら側を胴部上半、文様のある方を頭部と捉え、器種は壺と理解した。36は、横位沈線だけが見られるが、上記の特徴から35と同一個体と考えられる。35・36の出土位置はSK 3と重なっている。SK 3検出前の出土であるが、覆土資料である可能性が高い。37はB 8-21から単独で出土している。小破片で、器面の荒れが著しく、横位沈線のみが確認された。やや外反しており、頭部の一部と思われる。II群の可能性があろう。38はB 9-17から単独で出土している。遺存状態の悪い小破片で、弧状の平行沈線文が認められる。同様のモチーフ（連弧文）がしばしば天王山式に描かれることから、II群に分類した。39はB 9-18から単独で出土した。わずかに内湾しながら外反する口縁の壺であろう。口縁部上端際から屈曲部下まで横方向の沈線が幾段も描かれる。このなかには扁平な山形文や、刺突と縦位短沈線文を交互に描くものがある。前者は重菱形文が、後者は交互刺突文がそれぞれ変化したものと捉え、II群に分類した。40はA 10-15から単独で出土した。交互刺突文が見られるところから、II群に分類した。交互刺突文の前に平行沈線文が切かれているが、2本同時か1本描きかは不明である。刺突は、下例の刺突が先に上例の刺突が後に施されている。器種は不明。41～44はSK 3付近から出土している。いずれもLR繩文が施される。43と44は、胎土・焼成・繩文がSK 3出土の29と似ており、同一個体の可能性を指摘できる。45は底部破片である。B 9-16から単独で出土している。



第4図 弥生土器の分布

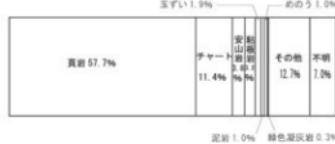


第5図 石器の分布

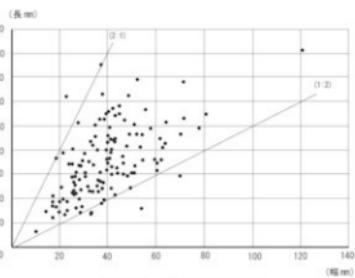


石器 46 は頁岩製の石鏃である。基部は有茎で、先端部がわずかに欠損している。47 は頁岩製で、表裏面には尖頭形に整形するための平坦剥離が施されている。石鏃未製品だろう。48 は頁岩の石錐である。つまみ部は欠損している。先端部分は、面形が三角形状になるように二次加工が施され、剥離には若干の磨耗が見られる。49 は頁岩製で、表裏互い違いに整形のための平坦剥離が施され、その後周縁に細かな二次加工が施される。先端部が欠損している。石槍未製品であろうか。50 ~ 62 は二次加工剥片である。50 ~ 56・59 ~ 62 は頁岩製、57・58 はチャート製である。51・53 ~ 55 は縦長剥片を素材としている。二次加工は側縁に施されており、特に 55 の裏面右側面には規則的な剥離が認められる。50・52・56 ~ 62 は不定形な剥片を素材としている。このうち 50・52・57・59・60・62 は、加工部の形状が弧状を呈する。50・52・57 は一部に抉るような加工が施され、59 はほぼ全周が加工されている。一方、56・58・61 は加工部形状が直線状を呈する。63・64 は頁岩製の石核である。63 は剥片を素材としており、素材腹面を打面としている。作業面には原礫面と先行した逆方向からの剥離面がみられる。64 も剥片素材の石核であり、素材裏面には大きく主要剥離面が残されている。素材周縁を打面としており、先行剥離面が球心状に残っている。

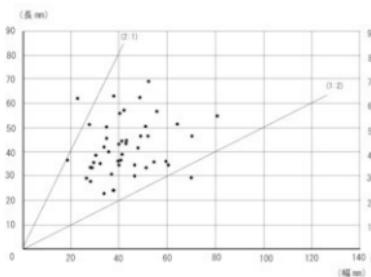
65 は緑色凝灰岩製の勾玉である。頭部に欠損がみられるがほぼ完形である。穿孔方向と径が一定していることから、片面穿孔で作られたと推測される。



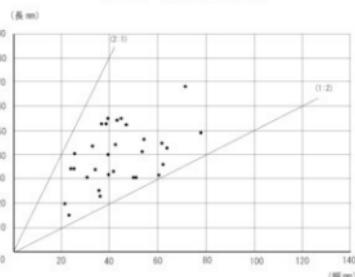
第7図 石材の割合



第8図 剥片類の長幅比



第9図 二次加工剥片の長幅比



第10図 使用痕のある剥片の長幅比

以下では、調査区から出土した石器、全290点について、若干の考察を加える。まず、石材の割合を第6図に示した。頁岩が半数以上を占め(57.7%)、チャート(11.4%)・安山岩(3.8%)・粘板岩(3.2%)がこれに続き、玉ずい・泥岩・めのう・緑色凝灰岩も少量含まれる。

今回の調査では、剥片類が263点(うち二次加工剥片78点、使用痕のある剥片53点)出土しており、石器組成の大半を占めている。石核も11点確認されており、石器製作、とりわけ剥片剥離が積極的に行われ、そこで生みだされた剥片が便宜的に利用されていたものと理解される。

剥片類に分析を加えてみよう。折損していない剥片類は141点あり、長幅比の分布を示したのが第8図である。さらに、これには二次加工剥片45点、使用痕のある剥片32点が含まれており、その長幅比を第9図と第10図に示した。第8図では、長幅とも10mm~80mmのなかにほぼ収まり、長幅比では2:1~1:2の範囲におよそ取まっている。この範囲内での集中あるいは偏在性がなく、均一な分布状況である。また、第9図と第10図の比較から、使用痕のある剥片は、長幅比2:1~1:2の範囲に完全に収まっており、さらに二次加工剥片と比べサイズにまとまりがあることが判る。したがって、使用痕のある剥片は、より素材選択性の高い器種だと言えるだろう。

#### B 古代の遺物(図版13)

須恵器は有台环・無台环・壺類などが出土した。小破片が多く、他の器種は判然としない。2点を図化した。66は壺の胴部破片である。内外面とも格子状タタキが認められる。67は66よりもやや薄手で、外面には格子状タタキ、内面は平行タタキとアテ具痕と思われる弧状の凹みが認められる。表面に小さい黒斑が認められる。佐渡小泊窯産のものであろう。

土師器も小破片のものが多くほとんどが図化に適うものではなかった。このうち1点のみ図化した。68は碗である。底部に回転糸切り痕が確認できる。内面には丁寧なロクロナデが見られる。土師器には、このほかに底部回転糸切り痕のある無台环があった。さらに外面ナデ調整の体部破片があり、これは壺類に分類されるだろう。

これらの須恵器・土師器は、おおよそ9世紀後半に帰属するものと考えられる。

#### C 中・近世の遺物(図版13)

70~74は珠洲焼である。70は壺の口縁部で、口径18cmを推計する。その形態から吉岡編年(吉岡1994)のIV期に分類される。71~73は壺の胴部破片である。71の外面の平行式打圧痕の打圧密度は3cmあたり5~6目とやや疎である。72も平行式打圧痕が見られ、打圧密度はやや密で、3cmあたり9~10目である。73には交差状の打圧痕が見られる。打圧密度は3cmあたり8本である。71と73には内面に押圧痕が見られる。74は片口鉢である。御目1単位13条で、幅3.2cmである。これらは小破片のため時期の比定は難しいが、IV期からV期にかけての所産であろう。75は越前焼のすり鉢である。御目1単位9条で、幅2.4cmである。76は瀬戸焼の皿である。内外面とも透明釉がかけられるが、底部にはかかっていない。底部には内外面とも部分的に砂の付着がみられる。77・78は唐津焼の皿である。両者とも透明釉がかけられており、内面には胎土目がある。79は伊万里焼の碗である。釉薬の厚さに斑があり、染付の発色が鈍い。76~79は、いずれも16世紀後半に遡るものである。

また、B区から古銭が5点出土した。80~83は北宋銭である。80は皇宋通宝、81熙寧元宝、82は聖宋元宝であろう。83は大觀通宝。84は寛永通宝である。

第3表 埋設土器

( ) 推存値

遺構名	地区	グリッド	形態	埋設状態	生存最大径(cm)	生存高(cm)	清掃状態	覆土	備考
UG 1	B 区	B 11-6	口縁高・底面	正位	(38.0)	(18.7)	概ねが欠落	1	—

第4表 土坑

( ) 推存値

遺構名	位置		形態		規模(m)		底面標高 (m)	長軸方向	覆土	遺物	備考
	調査区	グリッド	平面形態	断面形態	長径	短径					
P 9	B 区	C 10-1	不規則形	—	0.96	0.84	0.08?	N37° E	—	生土層・R 下・F・網 化粧分布範囲・削り込 み被出でます	—
S K 1	B 区	A 9-15	円形	U字状	1.84	1.12	0.42	N26° W	3	生土層	—
S K 2	B 区	A 10-4 + 9	扇円形	直立	(1.72)	1.48	0.16	N05° W	1	生土層	基坑? S K 3 に切られる 基坑? P 18E に切られる S K 3 を切る
S K 3	B 区	A 10-5 + 10	不規則円形	直立	1.30	1.08	0.18	N18° W	3	生土層	—

F : 刃片 R : 网 F : 使⽤底のある刃片 UF : 二次加工刃片

第5表 ピット

( ) 推存値

ピットNo.	位置		平面形態	断面形態	規模(m)		底面標高 (m)	覆土	遺物	備考	
	地区	グリッド			長径	短径					
P 1	A 区	C 3-11	不整齊円形	可状	1.68	1.34	0.25	E2.68	4	—	—
P 2	A 区	C 3-12	円形	U字状	0.38	0.32	0.10	E2.76	1	—	—
P 5	A 区	C 6-6	円形	弓状	0.38	0.28	0.11	E2.74	2	—	—
P 6	A 区	C 6-11	円形	偏斗状	0.34	0.27	0.18	E2.71	2	—	柱痕・板留め跡あり
P 8	B 区	C 8-11	不整齊円形	不整齊状	0.50	0.48	0.20	E2.94	2	—	—
P 11	B 区	B 10-11	不整齊円形	椭状	0.53	0.44	0.13	E2.97	1	生土層	—
P 16	B 区	A 10-5	扇方形	基状	0.48	0.30	0.09	E2.98	1	—	S K 3 を切る
P 16'	B 区	A 10-5	円形	弓状	0.46	0.32	0.08	E2.99	1	生土層・土加筋	—
P 18	B 区	A 10-10	不整齊円形	弓状	0.76	0.61	0.16	E2.91	1	—	—
P 22	B 区	B 10-11	円形	直状	0.49	0.36	0.06	E2.98	1	生土層・土加筋・灰窓跡、 U F	—
P 23	B 区	B 10-11 + 16	扇方形	偏底状	0.79	0.60	0.30	E2.77	3	U F	—
P 24	B 区	B 10-16	円形	U字状	0.39	0.35	0.11	E2.97	1	—	—
P 26	試験区	B 11-26	円形	弓状	1.03	0.73	0.31	E2.74	5	—	—
P 27	B 区	C 11-1	円形	偏底状	0.44	0.36	0.18	E2.84	—	生土層・土加筋	—
P 28A	B 区	B 10-7	不整齊円形	U字状	0.40	0.32	0.12	E2.96	1	—	P 29E に切られる
P 29B	B 区	B 10-7	不整齊円形	U字状	0.24	0.14	0.06	E3.06	1	—	P 29E を切る
P 32	B 区	B 10-8	不整齊円形	偏底状	0.54	0.41	0.36	E2.87	3	—	—
P 37	B 区	B 10-17	円形	U字状	0.45	0.41	0.12	E2.96	—	F	—
P 38	試験区	C 11-16	不整齊円形	椭状	1.04	0.45	0.25	E2.83	2	—	—
P 39	B 区	A 10-14	円形	弓状	(0.68)	0.58	0.17	E2.96	1	土加筋	—
P 40	B 区	A 10-14	円形	U字状	0.43	0.36	0.26	E2.94	—	R F	—
P 42	B 区	B 10-21	円形	U字状	0.34	0.32	0.15	E2.93	—	洗浄器	—
P 44	B 区	A 9-9	不整齊円形	偏底状	0.64	0.42	0.16	E2.89	2	—	—

F : 刃片 U F : 使⽤底のある刃片 R F : 二段加工刃片

第6表 溝状構造

( ) 平均値

遺構名	位置		規模(m)			傾斜方向(高→低)	長軸方向	覆土	遺物	備考
	調査区	グリッド	長さ	幅	深さ					
S D 1	A 区	B + C 5~6	5.44	(0.80)	0.39	東→西	N05° E	2	—	—
S D 2	B 区	A ~ C 8~10	21.12	(0.87)	0.29	北東→南西	N43° W	5	土加筋・生土層	B 8-8付近に隣接溝に 削り下がられた部分あり
S D 3	B - 試験区	B - C 10~11	13.04	(0.86)	0.09	南→北	N05° W N9° E	1	土加筋・生土層	F

P : 制片

第7表 土器観察表(1)

報告番号	出土位置 グリッド	出土遺構	種類	基盤	分類	器物部位	重量 (m·g)			土		色 製		焼成	文様・模様など		付箋物		備考	
							口径	底径	高さ	器厚	重量	生地土	埋入物		外面	内面	外面	内面		
1	B11-8	UG 1	生土層	素	立脚	口縁部～底部	(23.6)	8.7	(37.0)	8.3	126.2	今今松	~3mm 砂粒子 多	灰黄褐	淡黄褐	今今松	口縁部から斜面に沿って赤褐色 又、口縁部の立脚部に小量の とけ砂、口縁部上端に複数平行 凹部、交叉溝跡、斜面下半に横 筋柱ナメ	横筋柱ナメ		
2	C10-1	P 9	生土層	素	立脚	口縁部			0.7	13.9	7	~1mm 砂粒子 少	に赤い斑点	に赤い斑点	灰	瓦陶文鏡形輪、口縫輪形に施 且、口縁部上端に複数平行凹部 とけ砂、口縁部上端に複数平行凹 部、交叉溝跡、斜面下半に横筋 柱ナメ	横筋柱平行凹部	オコゲナ		
3	C10-1	P 9	生土層	素?	立脚?	口縁部			0.6	7.1	7	~2mm 砂粒子 中	に赤い斑点	に赤い斑点	今今松	口縫部上端部に施用擦磨研磨圧 痕				
4	C10-1	P 9	生土層	無?	立脚?	脚部			0.6	3.8	今今松	~1mm 白色不透 明粒? 多	に赤い斑点	に赤い斑点	今今松	真又? 縞纹? 縞纹平行凹輪、點狀凹輪			オコゲナ	
5	C10-1	P 9	生土層	無?	立脚?	脚部?			0.9	7.9	今今松	~2mm 品色粒子 中	灰白	に赤い斑点	今今松	灰白、状態、状態	ナメ			
6	C10-1	P 9	生土層	無脚	脚部				0.7	8.8	今今松	~3mm 砂粒子 多	に赤い斑点	に赤い斑点	今今松	瓦陶文鏡形輪?			オコゲナ	
7	C10-1	P 9	生土層	無脚	脚部				0.6	7.2	今今松	~1mm 砂粒子 多	に赤い斑点	に赤い斑点	灰	瓦陶文鏡形輪			オコゲナ	
8	C10-1	P 9	生土層	無脚	脚部?				0.6	11.4	今今松	~1mm 砂粒子 多	に赤い斑点	淡黄褐	今今松	解剖開文?			ヌヌ	
9	C10-1	P 9	生土層	無脚	脚部				0.8	10.2	7	~1mm 砂粒子 微	に赤い斑点	に赤い斑点	灰	瓦陶文?				
10	C10-1	P 9	生土層	無脚	脚部				0.6	11.7	7	~3mm 砂粒子 少	に赤い斑点	灰白	灰				ヌヌ中	
11	C10-1	P 9	生土層	無脚	脚部				0.5	10.3	灰	~2mm 白色不透 明粒? 多	灰黄褐	に赤い斑点	灰		ナメ		深紅	
12	C10-1	P 9	生土層	無脚	脚部				0.6	22.6	今今松	~2mm 砂粒子 多	に赤い斑点	淡黄褐	灰					
13	C10-1	P 9	生土層	無脚	脚部				0.5	28.2	7	~1mm 砂粒子 少	に赤い斑点	に赤い斑点	灰		ナメ	オコゲ		
14	C10-1	P 9	生土層	無脚	脚部?	脚部下平 一底板			0.6	15.6	今今松	~5mm 砂粒子 多	淡黄褐	淡黄褐	灰			ヌヌ		
15	A10-4	S K 2	生土層	素	立脚?	口縁部			0.7	18.6	今今松	~7mm 砂粒子 中	に赤い斑点	淡黄褐	灰	口縫部上端に瓦陶文鏡形輪、瓶 縫に赤い斑点			オコゲナ	
16	A10-4	S K 2	生土層	素	立脚?	口縁部			0.6	14.5	今今松	~2mm 砂粒子 少	淡黄褐	淡黄褐	灰	口縫部上端に瓦陶文鏡形輪、瓶 縫に赤い斑点				
17	A10-4	S K 2	生土層	素?	1脚	脚部上 半?			0.8	47.4	今今松	~3mm 砂粒子 多	基底	に赤い斑点	灰	重慶形紋様		オコゲナ	ヌヌ	

第8表 土器観察表(2)

報告番号	出土位置	埋蔵	分類	施存部位	重量 (m·g)			土		色 質		性成	文様・圖案など			付着物		備考
					口径	厚径	標高	断面	重量	生地土	混入物	外因	内因	外因	内因	外因	内因	
29	A10-4	SK 2	陶生土器	素?	1 時	腹部			0.8	21.2	中生灰	~2m 鉛鉱子 少	に古い実機	灰白	今後	基面削り火?・底面削り面	スス多	
31	A10-6	SK 2	陶生土器	底盤	調査下手 ~底盤		7.5		0.8	137.5	中生灰	~3m 鉛鉱子 少	汎黄褐	に古い実機	灰			スス少 オコゲ多
32	A10-4	SK 2	陶生土器	底盤	腹部				0.8	6.2	中生灰	~1m 白色不透 鉛鉱子 少	灰黄褐	に古い実機	灰	山陽大廈用粘	ナデ?	オコゲ多
33	A10-4	SK 2	陶生土器	底盤	頭部				0.6	3.8	中生灰	~1m 鉛鉱子 少	灰黄褐	灰黄褐	灰	ナデ	スス	
26	A10-4	SK 2	陶生土器	底?	腹部	口縁端付 近?			0.6	16.3	中生灰	~2m 鉛鉱子 少	に古い実機	灰白	灰		スス	
29	A10-4	SK 2	陶生土器	底盤	腹部		7.0		0.6	69.4	中生灰	~3m 鉛鉱子 少	灰白	灰白	灰		スス	
28	A10-9	SK 2	陶生土器	底盤	腹部				0.7	81.8	中生灰	~3m 白色不透 鉛鉱子 少	灰灰	灰白	今後	山陽大廈用粘	スス少	
29	A10-8	SK 2	陶生土器	底盤	腹部				0.8	72.8	中生灰	~2m 鉛鉱子 少	に古い実機	に古い実機	牛牛灰	山陽大廈用粘・背模用粘	ナデ?	
30	A10-5	SK 3	陶生土器	底盤	腹部				0.7	17.0	中生灰	~4m 鉛鉱子 少	汎黄褐	灰黄	中生灰	黄火		
32	B10-11	P22	陶生土器	底?	腹部				0.7	6.3	中生灰	~3m 鉛鉱子 少	汎黄褐	灰黄	今後	黄火?		
24	C10-17	SD 8	陶生土器	底盤	腹部				0.7	14.5	中生灰	~2m 基色鉛子 少	灰白	灰白	今生灰			
35	A10-8	(SK 8)	陶生土器	素	1 時	腹部			0.8	26.6	中生灰	~1m 鉛鉱子 少	に古い実機	に古い実機	灰	重慶試験器	スス多 オコゲ多	
36	A10-5	(SK 8)	陶生土器	素	1 時	腹部			0.6	8.9	中生灰	~1m 鉛鉱子 少	灰黄褐	基	供在試場		スス多 オコゲ多	
37	B 9-11		陶生土器	二時?	腹部?				0.7	4.6	中生灰	~1m 基色鉛子 少	に古い実機	灰黄	今後	供在試場		
38	B 9-17		陶生土器	二時?	腹部				0.6	6.2	中生灰	~2m 鉛鉱子 少	に古い実機	汎黄褐	中生灰	弧状平行比縫	オコゲ	
39	B 9-18		陶生土器	素	二時	腹部			0.8	18.1	中生灰	~3m 鉛鉱子 少	汎黄褐	灰白	今後	基面削り・平行空隙・交叉斜窓	スス少	
40	A10-18		陶生土器	二時	腹部				0.6	5.0	素	~1m 基色鉛子 少	に古い実機	被	被在平行比縫・穴五列突	スス・被ワ グ		
41	A10-5	(P14)	陶生土器	底盤	腹部				0.8	5.9	素	~1m 白色不 透鉛子 少	灰黄	灰	山陽大廈用粘			

第9表 土器観察表(3)

報告番号	出土位置 グリッド・出土遺構	種別	基盤	分層	埋存部位	法量(cm・g)			地土		色調		焼成	文様・開口など		付着物		備考	
						口径	底径	高さ	厚さ	重量	生地土	混入物	外面	内面	外模	内模	外模	内模	
42	A10-10 (SK3)	陶生土器	直縁	縁部						0.7	7.3	中や暗	~1mm 黒色粒子少	焼成	に広い開口	中や吸	U頭文		
43	A10-9 (P16)	陶生土器	直縁	縁部						0.9	9.4	中や暗	~3mm 白色不透明粒子多	焼成	深黄	中や吸	U頭文		
44	A10-8 (SK3)	陶生土器	直縁	縁部						0.9	17.3	中や暗	~3mm 粘粒子多	焼成	深黄	中や吸	U頭文		
45	B 9-16	陶生土器	直縁	底部		6.7				1.1	63.0	黒	~3mm 粘粒子多	灰黄	灰黄	中や吸			
46	B 8-16 B 8-12	直縁器	直	縁部						1.0	66.1	黒	~1mm 白色不透明粒子少	灰	灰	無	卷子状タキ	卷子状タキ	
47	B 7-21	直縁器	直	縁部						0.7	21.8	黒	~1mm 黑色粒子多	灰灰	灰	卷子状タキ	平行タキ		
48	A11-4	土器器	直	縁部・直部		8.4				0.6	42.3	黒	~1mm 白色透明粒子少	焼成	に広い黄緑	灰	ロクロナザ	ロクロナザ	直部に凹輪外張り痕
49	C11-1	P27	土器器	直	縁部					0.8	10.8	黒	~1mm 粘粒子少	焼成	浅黄緑	中や吸	平行タキ	圓心内タキ	
50	A 7-30	直縁器	直	口縁部	IK.0					1.1	48.6	黒	~1mm 白色不透明粒子少	灰	灰	灰	ロクロナザ	ロクロナザ	直部
51	B 9-6 A 8-14	直縁器	直	縁部						1.0	123.2	黒	~1mm 白色透明粒子少	灰	灰	無	平行式打刃痕	所用灰	ヌヌ V型?
52	B 9-16	直縁器	直	縁部						0.8	25.6	黒	~1mm 白色不透明粒子多	灰	灰	無	平行式打刃痕		直～V型
53	B11-1 B10-21	P45	直縁器	直	縁部					1.0	23.9	黒	~1mm 白色透明粒子少	灰	灰	灰	直平行打刃痕	所用灰	直～V型?
54	B10-19	直縁器	片口縫	縁部						1.1	77.7	黒	~1mm 白色透明粒子少	灰	灰	灰	ロクロナザ	無	ロクロナザ 直～V型? 斜口: 1段位9角・幅3.2cm
55	B 8-1	直縁器	すり縫	縁部						0.7	26.6	黒	~2mm 石英多	に広い表面	に広い表面	灰	ロクロナザ	無	側面: 1段位9角・幅3.4cm
56	B 7-12	直縁器	直	口縁部～底部	11.0	7.0	3.1	0.7	34.5	黒		オーリーブ質	オーリーブ質	灰	道筋物・漆	道筋物・漆		16世紀後半	無止?
57		直縁器	直	縁部・直部	4.1					1.2	55.5	黒	赤褐色・黄褐色	灰白	無	ロクロナザ	道筋物・鉄土目	ヌヌ	16世紀後半
58		直縁器	直	縁部・直部	3.7					1.0	30.7	黒		無	無	ロクロナザ・一連道筋物	道筋物・鉄土目		16世紀後半
59	伊万里焼	直	口縁部～底部	15.1						0.4	11.7	黒		灰白	無	生剥けの鉄蓋・塗付	生剥けの鉄蓋		船ムラアリ・和歌伊万里

第10表 石器観察表

報告番号	出土位置		器種名	石材名	計測値				備考
	グリッド	出土遺構			重量(g)	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	
15	C10-1	P 9	石鏃	頁岩	2.20	40.9	15.1	4.9	アメリカ式石鏃
16	C 9-21	P 9	石鏃未製品	頁岩	1.62	29.2	19.4	4.4	
26	A10-4	SK 2	二次加工剝片	頁岩	111.43	50.8	93.2	23.6	
27	A10-4	SK 2	二次加工剝片	頁岩	11.01	34.1	50.9	10	二次加工の一例に磨耗痕あり
31	A10-5	SK 3	二次加工剝片	頁岩	8.61	62.1	21.7	9.8	
33	A10-14	P40	二次加工剝片	頁岩	9.02	26.2	50.9	7.1	二次加工の一例に磨耗痕あり
46	A 9-24		石鏃	頁岩	1.37	37.7	11.6	4.5	有孔
47	A 7-20		石鏃未製品	頁岩	2.70	33.7	18.9	5.4	
48	B 9-20		石鎚	頁岩	1.95	36.6	9.2	7	断面に磨耗痕あり
49	C 7		石鏃未製品	頁岩	5.68	55	20.4	6.9	I層裏下出土
50	B10-19		二次加工剝片	頁岩	35.65	57.4	55.1	12.1	
51	B 9-21		二次加工剝片	頁岩	11.28	57.4	40.3	8.7	二次加工の一例に磨耗痕あり
52	A10-5		二次加工剝片	頁岩	15.20	45.7	44.6	13.4	
53	B10-17		二次加工剝片	頁岩	8.12	39.2	28.2	12.1	
54	B10-13		二次加工剝片	頁岩	9.39	47.4	25.5	10.9	
55	A 8-15		二次加工剝片	頁岩	3.49	27.4	24.4	7.7	
56	A10		二次加工剝片	頁岩	2.64	26.9	21.9	4.7	
57	A 9-14		二次加工剝片	チャート	16.25	42.3	57	8.6	
58	B区		二次加工剝片	チャート	21.62	32.6	48.2	13.3	表土出土
59	B10-19		二次加工剝片	頁岩	22.46	37.1	59.9	13	
60	B 7		二次加工剝片	頁岩	19.39	45.9	47.5	13.6	
61	A10-24		二次加工剝片	頁岩	13.41	33.6	44.8	13.1	
62	A10-4		二次加工剝片	頁岩	64.49	55.4	81.6	18.6	
63	A 9		石鏃	頁岩	79.71	58.2	59	26.5	表土出土
64	A10-5		石鏃	頁岩	268.95	79.7	99.8	44	
65	B 9-2		勾玉	緑色瑪瑙岩	12.77	45.6	25.4	10.5	

## 2 立会調査区

既に第1章で述べたとおり、工事による掘削深度が遺跡深度に到達する箇所のうち、本発掘調査対象外とした、掘削幅1m以下の水路部分（第11図④～⑦など）と、これに付随する掘削幅1m超の集水溝部分（③・⑤の一部など）を対象に立会調査を実施した。このほか、試掘調査で遺物を検出したが二次的な分布と判断した範囲（第11図①・②など）、同じく試掘調査で遺構と思われるプランを検出したが、遺物が出土せず、周知化を見送った範囲（第11図⑧など）も対象とした。

対象範囲については、原則として表土より下位の層を工事到達深度までバックホウによるすき剥ぎで掘り進めよう指示し、調査を進めた。調査期間は平成26年5月22日から10月1日までに及び、8地点で遺物が出土した（第11表・第11図・第13図）。

岩田原遺跡東側では、集中的な立会調査にもかかわらず、地点①・③で少量の土師器小破片を検出したに過ぎず、二次的な分布とした試掘調査での判断を追認した結果となった。ただし、地点②での出土は、不整形を呈する土坑状の落ち込みからのものであり、今後も留意が必要である。岩田原遺跡の範囲内となる地点③～⑦からは、須恵器・土師器・中・近世の陶磁器が出土した。試掘調査94T周辺、特に工区南端からの遺物が多い。また、地点⑤のうち、集水溝の部分で検出した溝状遺構（第12図）は、覆土に須恵器・土師器を含んでおり、9世紀後半～10世紀前半の所産と推測される。試掘調査94Tで検出した遺構群と同時期の遺構だろう。地点⑧では、試掘調査129Tで検出した溝状プランを明確な遺構として把握することはできなかったが、その南西から珠洲焼の壺とすり鉢がまとまって出土した。今後遺跡範囲を検討した上で、小字名に因み、ここを「諒訪の下遺跡」として周知化する予定である。

この調査で出土した遺物の実測図を第13図に示した。1・2は地点④出土。1は須恵器壺の体部片、2は中世瀬戸窯産の灰釉陶器である。3は地点⑤出土の須恵器で、壺の体部片と推測される。4は地点⑥出土の土師器片。5は地点⑦から出土した須恵器壺の体部片である。6～8は地点⑧から出土した珠洲焼片で、6・7は壺、8はすり鉢である。このうち8の破断面には、漆と思われる付着物が確認できる。

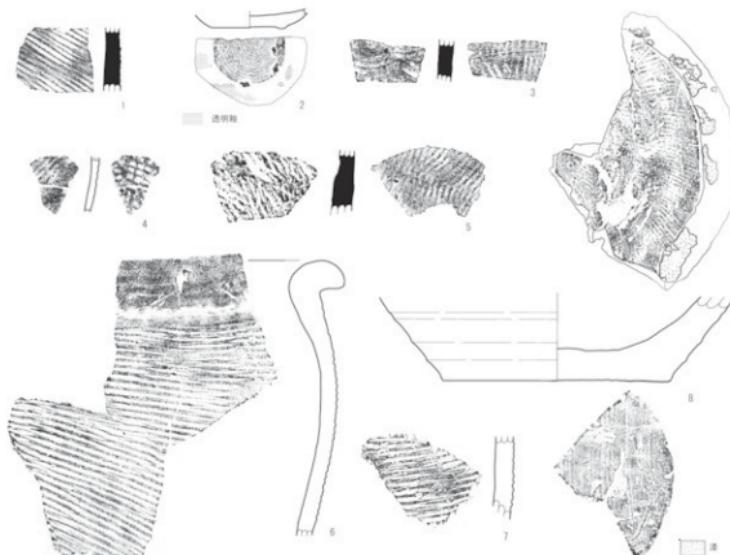
第11表 立会調査出土遺物一覧

遺跡	地点	注記	種別	器種	点数	時期・備考	図番号
岩田原	①	ITH14 立会 N11・13	土師器	不明	8	古代 小破片	
	②	ITH14 立会 P13 ドコウ	土師器	不明	9	古代 小破片	
	③	ITH14 立会 Q2 マス2	土師器	不明	2	古代	
	④	ITH14 立会 Q1 ニシ	須恵器	壺	1	古代	1
			土師器	不明	1	古代 小破片	
			陶器	皿	1	中世 瀬戸窯 灰釉	2
	⑤	ITH14 立会 Q1 ミナミ	磁器	不明	1	近世 小破片	
			須恵器	壺？	3	古代	3
			須恵器	壺	1	古代 佐渡小泊窯産	
	⑥	ITH14 立会 Q2・3 ミナミ	土師器	椀ほか	21	古代	
			須佐唐津	すり鉢	1	17世紀後半～18世紀前半	
			土師器	壺	1	古代	4
鍛治田	⑧	スワノシタ14 立会	土師器	椀ほか	20	10世紀？	
			唐津焼	すり鉢	1	18世紀後半	
			須恵器	壺	1	古代	5
			土師器	不明	9	古代 小破片	
			唐津焼	すり鉢	1	18世紀後半	
			不明	すり鉢	1	不明	
			珠洲焼	壺	8	13世紀	6
			珠洲焼	壺	1	中世	7
			珠洲焼	すり鉢	1	15世紀	8



第11図 立会調査位置図 (1:10,000)

第12図 地点⑤枠部分検出構造図 (1:80)



第13図 遺物実測図 (1:3)

## 第V章 自然科学分析

### 1 自然科学分析の概要（第14・15図）

今回の調査では2つの対象に対して自然科学分析を行った。一つは調査区近くにあった露頭を対象としたもので、もう一つは出土土器に付着していた炭化物を分析したものである。

露頭は、遺跡が載る段丘の西端、調査区から約30mに位置した。ほ場整備によって段丘縁辺がL字状に削出され、地表面から深さ約4～5mまでの地層が露出していた（第14図）。この露頭の調査をすることで、遺跡が立地する段丘面の形成年代やその過程、周辺の自然環境等が明らかになるであろうとの見通しから、対象露頭の観察・試料採取・測量を実施した。L字状の露頭のうち、南北方向の面を西向き露頭、東西方向の面を南向き露頭と、便宜的に呼称する。観察範囲は約51mである（第15図）。南向き露頭ではLoc. 1とLoc. 2で柱状図を作成した。これを合成したものが第16図である。西向き露頭ではLoc. 3において柱状図を作成して第18図に示した。露頭に露出していた立木や流木等の一部を採取し（w1～7：第15図）、さらにLoc. 3では土壤試料の採取も行った（試料番号1～16：第18図）。

他方、炭化物の付着が認められた土器は、SK2から出土したものである（第IV章1（3）B・図版3・図版8及び写真図版7-19）。SK2は、調査区の南西側で発見した浅い土坑で、覆土から弥生土器片26点・石器（剥片）5点が出土している。出土土器には複数個体が含まれ、いずれも小～中サイズの破片であった。口縁部片・胴部片・底部片があり、整理作業時に一部接合したものの大破片になるものはなかった。これは、遺構覆土が後世の耕作等の影響を受け、それぞれ個体が破損されたり、個体の大半が遺構外へ失われたりしたためと考えられる。しかしながら残された遺物は、土坑の中央付近のはば同一レベルで出土しており、接合関係も認められる。したがって、ある程度の一括性（同時性）を保持しているものと考えられる。その中でも試料を採取した土器（図版8-19）は壺の頸部から胴部にかけての比較的大きな破片である。その文様から弥生時代中期後葉の宇津ノ台式と考えられる。宇津ノ台式が帰属する弥生時代中期後葉は、これと後続する後期前葉の天王山式と共に活発な議論が交わされている。新潟県における編年研究でも、奥三面川流域の出土資料を中心に当該期を4細分する意欲的な試みがなされているが（澁沢・野田ほか 2003）、中越地域の資料でも検証を進める必要がある。今回の発掘調査によって得られた資料は限定的であり、型式学的な検討是不可能であるため、SK2出土土器の年代測定を行って編年研究に資することにした。

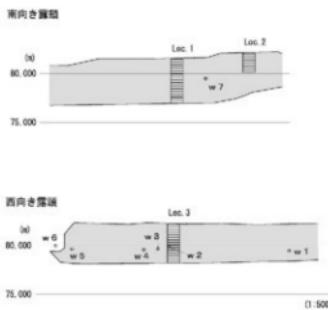
以下、南向き露頭（Loc. 1・2）の観察所見は2節で、パリノ・サーヴェイ（株）による北向き露頭（Loc. 3）の観察所見及び土壤分析結果、炭化物の年代測定結果については3節で報告する。

### 2 南向き露頭（第16図）

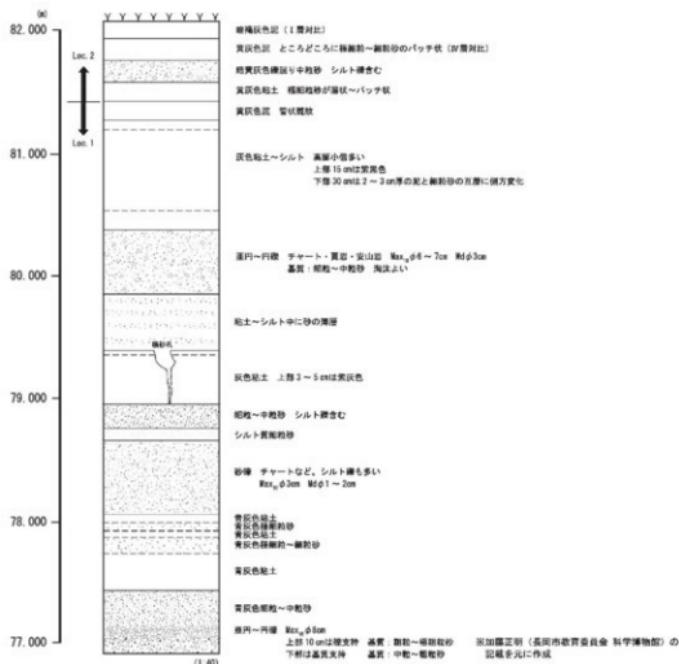
南向き露頭は、Loc. 1と2を合わせると層厚約5mの地層が観察された。最上位にある暗褐色泥層は現耕作土であり、調査区で観察されたI層に、その下の黄灰色泥層は同じくIV層に対比できるものと考えられる。各層とも側方変異が著しく、西向き露頭との直接的な対比は難しいが、現耕作土や土壤化したものを除くと、いずれも河床や氾濫原、湿地・沼沢地等に堆積した河川運搬物である。また、下位と中位に砂礫層が見られ、それぞれの上に粒径の細かい砂やシルト、粘土が堆積していることも共通している。大きくは同じような環境を経て、同じように変化していると推測される。また、灰色粘土層中（標高79.4m付近）に、液状化による噴砂孔が観察された。



第14図 調査区と露頭位置図 (1:5,000)



第15図 觀察箇所(Loc.)と試料採取箇所(w)



第16図 南向き露頭 Loc. 1・2柱状図 (1:40)

### 3 岩田原遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### (1) はじめに

岩田原遺跡（新潟県長岡市小国町上岩田地内）は、小国盆地東縁、信濃川の支流である渋海川の右岸に分布する河岸段丘上に立地する。地形分類図〔鈴木 1988〕などを参考すると、小国盆地東側に分布する小丘陵より流下する柄沢川流域周辺には隆起扇状地の分布が指摘されているほか、本遺跡が載る段丘面は完新世に対比されている。

岩田原遺跡の発掘調査の結果、弥生時代の土坑をはじめ、時期不明の溝状遺構やピットなどの遺構が検出されているほか、弥生時代の土器や石器、石製品、平安時代の土師器や須恵器、中世・近世の陶磁器などが確認されている。また、岩田原遺跡西側では場整備に伴う造成工事が行われており、それに伴って岩田原遺跡が載る地形面を構成する堆積層の露頭が観察された。この露頭は、西向き露頭と南向き露頭東とがあり、この堆積層の中には根株が残る立木様の木材および倒木あるいは流木様の木材などの分布や大型植物遺体が混じる有機質・腐植質土壤が挟在する状況が確認されている。

本報告では、岩田原遺跡より出土した弥生土器の年代観の検討、遺跡形成以前の堆積層の年代観や古植生の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

#### (2) 露頭出土種実・木材および弥生土器の年代

##### A 試料

放射性炭素年代測定試料は、岩田原遺跡西側の西向き露頭より出土した立木1点および堆積層中に挟在する有機質土壤より出土した種実遺体2点と、岩田原遺跡のSK2より出土した弥生土器1点の計4点である。以下に、各試料の概要を記す。

###### a) 露頭出土種実・木材

試料は、II-1に記した上部・下部有機質土壤および根株が残る立木様の木材の年代観の検討を目的として選択した種実遺体2点と木材1点である。種実遺体試料は、下部有機質土壤（試料番号9）から出土した種実がトチノキ果実、上部有機質土壤（試料番号15）から出土した種実がホオノキ種子である。また、木材試料の立木（w1）は、現地にて輪切りとして採取しており、室内にて木口（横断面）の研磨および観察を行い、観察範囲内に残存する樹皮直下付近の年輪外側より5年分を採取し、測定に供している。

###### b) SK2出土土器

試料は、SK2より出土した弥生土器である。本試料は、口縁部から胴部までが残存する破片であり、土器外面の口縁部と胴部の一部に厚さ約1mm前後の炭化物の付着が認められる（写真図版7）。試料は、整理作業時の汚染の可能性を考慮して、メスなどで表面を軽く削った後に残存した炭化物を採取し、測定に供している。

##### B 分析方法

測定試料に土壤や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・ア

ルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1 g の酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C (30分) 850°C (2時間)で加热する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて  $\text{CO}_2$  を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した  $\text{CO}_2$  と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加热し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3 MV 小型タンデム加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置(NEC Pelletron 9SMH-2)を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定も行うため、この値を用いて  $\delta^{13}\text{C}$  を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1 (Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期 5,730 ± 40 年)を較正することである。暦年較正は、CALIB 7.0.1 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

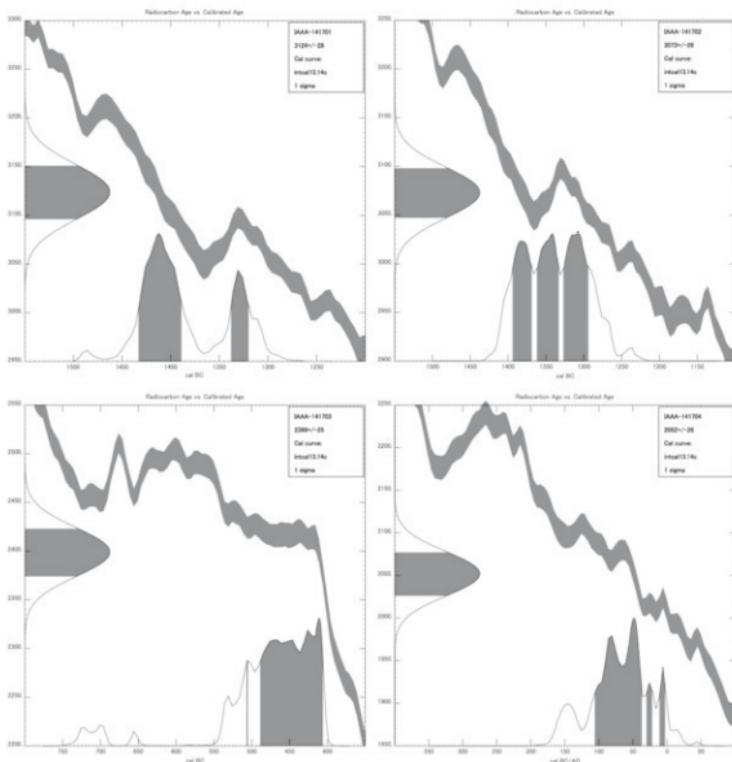
暦年較正結果は  $\sigma + 2\sigma$  ( $\sigma$  は統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95.4% の確率で存在する範囲) の値を示す。また、表中の相対比は、 $\sigma + 2\sigma$  の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

第 12 表 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果				相対比	測定機関 CodeNo.			
				$\sigma$	$2\sigma$	$\sigma$	$2\sigma$					
西向き露頭 w1 木村 (トチノキ)	3,120 ± 39	-27.22 ± 0.66	3,124 ± 28	cal BC 1,433 - cal BC 1,388	cal BP 3,382 - 3,337	0.762						
				cal BC 1,338 - cal BC 1,320	cal BP 3,387 - 3,269	0.238			IAMS-141701			
				cal BC 1,498 - cal BC 1,485	cal BP 3,437 - 3,434	0.005						
				cal BC 1,452 - cal BC 1,369	cal BP 3,401 - 3,318	0.673						
西向き露頭 w1-2 水利番号9 穀実遺体 (トチノキ葉実)	3,070 ± 39	-24.11 ± 0.36	3,073 ± 26	cal BC 1,361 - cal BC 1,298	cal BP 3,310 - 3,247	0.322						
				cal BC 1,394 - cal BC 1,368	cal BP 3,343 - 3,317	0.282						
				cal BC 1,361 - cal BC 1,333	cal BP 3,310 - 3,282	0.334			IAMS-141702			
				cal BC 1,328 - cal BC 1,293	cal BP 3,275 - 3,242	0.285						
西向き露頭 w1-3 水利番号15 穀実遺体 (ホオノキ種子)	2,400 ± 39	-23.03 ± 0.58	2,399 ± 25	cal BC 1,410 - cal BC 1,266	cal BP 3,359 - 3,215	1.000						
				cal BC 506 - cal BC 505	cal BP 2,456 - 2,454	0.019						
				cal BC 489 - cal BC 496	cal BP 2,438 - 2,355	0.981						
				cal BC 727 - cal BC 717	cal BP 2,426 - 2,666	0.013			IAMS-141703			
岩田原遺跡 M2-1 上層 (外付け骨炭化物)	2,050 ± 39	-24.18 ± 0.49	2,062 ± 26	cal BC 706 - cal BC 694	cal BP 2,655 - 2,643	0.017						
				cal BC 541 - cal BC 490	cal BP 2,490 - 2,349	0.971						
				cal BC 102 - cal BC 36	cal BP 2,051 - 1,985	0.816						
				cal BC 31 - cal BC 20	cal BP 1,980 - 1,969	0.087						
				cal BC 11 - cal BC 1	cal BP 1,969 - 1,960	0.096			IAMS-141704			
				cal BC 163 - cal BC 129	cal BP 2,112 - 2,078	0.102						
				cal BC 120 - cal AD 16	cal BP 2,069 - 1,954	0.898						

### C 結果および考察

露頭より出土した種実・木材および土器付着炭化物の同位体効果による補正を行った測定年代（補正年代）は、立木（w 1）が  $3,120 \pm 30$  yrBP、下部有機質土壤出土種実（トチノキ果実）が  $3,070 \pm 30$  yrBP、上部有機質土壤出土種実（ホオノキ種子）が  $2,400 \pm 30$  yrBP、SK 2 弥生土器（外面付着炭化物）が  $2,050 \pm 30$  yrBP である（第12表）。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果（ $1\sigma$ ）は、立木（w 1）が calBC 1,433 – calBC 1,320 (calBP 3,382 – 3,269)、下部有機質土壤出土種実（トチノキ果実）が calBC 1,394 – calBC 1,293 (calBP 3,343 – 3,242)、上部有機質土壤出土種実（ホオノキ種子）が calBC 506 – calBC 406 (calBP 2,455 – 2,355)、SK 2 弥生土器（外面付着炭化物）が calBC 102 – calBC 1 (calBP 2,051 – 1,950) を示す（第12表、第17図）。



第17図 暦年較正結果（ $1\sigma$ ）

以上の結果について、[小林 2008;2009]などを参考とすると、立木（w1）と下部有機質土壌出土種実（トチノキ果実）が縄文時代後期後半頃、上部有機質土壌出土種実（ホオノキ種子）が縄文時代晚期後半頃、SK2出土の弥生土器が弥生時代中期後半から末頃と推定される。

### （3）古植生

#### A 試料

##### a) 概要

試料は、西向き露頭（以下、Loc 3）より採取した土壤や種実、西向き露頭と南向き露頭より出土した立木様および倒木あるいは流木様の木材からなる。以下に、Loc. 3 の観察所見および採取試料と木材試料の概要を記す。

##### i ) Loc. 3

西向き露頭のLoc. 3とした箇所は、現在の地表面から露頭基底まで層厚約3mを測り、堆積層は岩相や堆積構造などから5つの層に大区分される。上位より1～5層と仮層名を付し、以下に各層の概要を記す。また、堆積相の形状を示すarchitectureについては、[中嶋ほか 2004]に従い、「外形」と表現する。

##### ・ 5層（深度約304-190cm）

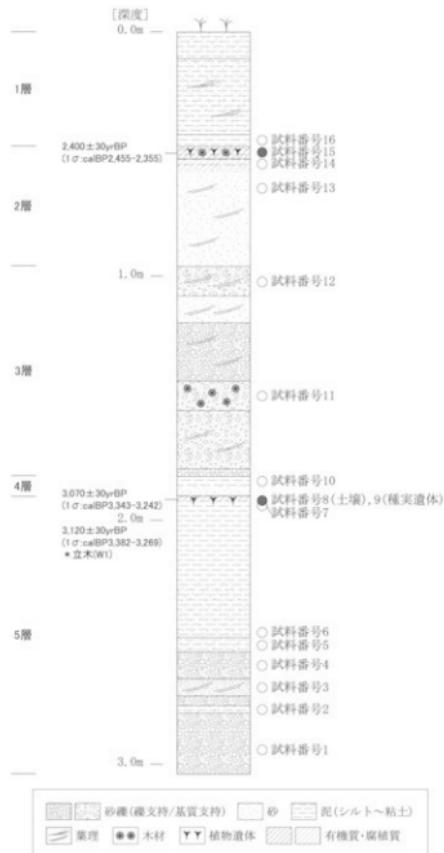
5層は、砂礫～砂層を挟在する泥質砂～砂質泥の互層からなる。本層下部に挟在する砂礫層の外形は浅い流路状の層理面をなし、下位堆積物を侵食して堆積する。層相は、上方細粒化する中礫～細礫からなり、不明瞭なトラフ型斜交葉理が確認される。また、浅い流路状の肩部には砂礫層と同時異相の氾濫堆積物である極粗粒砂～細粒砂が堆積する。本層上部に相当する砂礫～砂層の上位には泥質砂～泥が累重し、最上部にはトチノキの果実などの植物遺体が混じる有機質に富む泥層（以下、下部有機質土壤）が認められる。なお、Loc. 3南方では、この有機質に富む泥層に相当する層準の下位より、立木とみられる根株状の木材（w1）が確認されている。以上の層相から、5層は、浮遊土砂を多く含む懸濁した氾濫水が滞水域で浮遊沈降して形成されたと解釈され、下部層準形成期には間欠的な洪水堆積物の流入があり、浅い流路状の凹地を形成していたことが推定される。また、上部形成期には、有機質に富む腐植層の形成や立木様の根株が観察されることから、滞水域の水位低下や離水によって地表面付近で土壤生成が進行する時期があったと判断される。

##### ・ 4層（深度約190-182cm）

4層は、層状に堆積する、植物遺体葉理を挟在する砂質泥～泥質砂薄層の累重からなる。なお、Loc. 3では、3層の侵食により層厚は約8cm程度であるが、同層の個方方向の観察では層厚約50cm程度となる状況が観察されている。以上の層相から、5層上部形成期は離水傾向にあったものの、本層形成期には何らかの理由により調査地点の地下水位が上昇傾向に転じ、懸濁した氾濫水が滞水域で浮遊沈降する時期を挟在する湿地・沼沢地のような堆積場へと変化したことが推定される。

##### ・ 3層（深度約182-96cm）

3層の外形は流路状の層理面をなし、上記した4、5層を侵食して累重する、トラフ型斜交葉理の発達する砂礫からなる。砂礫層中には、倒木あるいは流木様の木材や侵食された4、5層由来と考えられるラグ堆積物が混じる。また、砂礫層は侵食と堆積を繰り返しながら、個方に移動している状況も確認される。以上の層相から、3層形成期には、調査地点において流路が形成され、不安定な堆積場へと変化し、侵食堆積を繰り返しながら氾濫原が発達していったことが推定される。



第18図 西向き露頭 (Loc. 3) の模式柱状図  
および試料採取位置 (1 : 20)

・2層 (深度約 96-47cm)

2層は、3層の砂礫層を層状に覆う砂～泥からなり、上方細粒化する。最上部は暗灰色～暗褐色腐植質極細粒砂～砂質シルトからなり、土壤生成が進行している。また、最上部の凹地には大型植物遺体が多く混じる黒～黒褐色泥（以下、上部有機質土壤）が堆積する。以上の層相から、2層形成期には、流路の移動や放棄により、ウォッシュロードなどの浮遊物質が沈降堆積する湿地・沼澤地のような場所へと変化し、堆積後半には土壤生成が進行する安定した堆積場へと変化したことが推定される。

・ 1層（深度約47～0cm）

1層は、2層を層状に覆う、氾濫堆積物の累重からなる。下部は灰～褐灰色を呈する泥質細粒砂～中粒砂、上部は砂質泥～泥質砂からなり、上部ほど泥がちとなる。1層形成期には調査地点は河川の氾濫の影響を頻繁に受ける氾濫原の堆積環境であったと推定される。

以上の観察所見に基づく模式柱状図を第18図に示す。また、Loc. 3では、上述した分析目的および堆積物の室内観察用として土壤試料15点（試料番号1～8, 10～16）と、下部有機質土壤より単体で出土した種実遺体（試料番号9）を採取している。これらの試料の採取位置は第18図に併記したので参照されたい。また、土壤試料については、下記の立木様（w1）の木材試料付近の下部有機質土壤の相当層からも採取している。採取試料は、層厚3cm程度の大型植物遺体が混じる黒～黒褐色泥（w1付近）である。

ii) 木材試料

木材試料は、西向き露頭より出土した木材（w1～6）と南向き露頭より出土した木材1点（w7）の計7点である。これらの木材試料は、Loc. 3の観察所見と堆積層の側方への連続性の確認から、下部有機質土壤より下位に根張りする立木様の木材（w1, 7）と、上記した3層の基底より出土した木材（w4, 5, 6）および3層中より出土した木材（w2, 3）とに分けられる。また、3層より出土した丸太（芯持丸木）状の木材については、いずれも樹幹がおよそ東西方向となる様子が確認された。なお、これらの試料の採取は、丸太（芯持丸木）状を呈する木材は可能な限り輪切りとして採取し、不定形（分割状）の木材片などは本取りを確認した後に年輪外側部分より木片を採取、あるいは木材片そのものを採取している。

b) 分析試料

本項では、上述した分析目的を踏まえ、下部有機質土壤と上部有機質土壤を花粉分析および微細物（微細植物片）分析の対象とし、花粉分析にはw1付近とLoc. 3 試料番号15の2点を、微細物分析にはLoc. 3 試料番号8, 9と同試料番号15の3点を供した。また、樹種同定にはw1～7の7点を供した。

## B 分析方法

a) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や〔島倉 1973〕・〔中村 1980〕・〔藤木・小澤 2007〕・〔三好ほか 2011〕等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類を-（ハイフン）で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

b) 種実遺体の抽出同定

堆積物から種実などの微細な植物遺体を分離・抽出するために、試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の篩内の試料を粒径別にシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本および〔石川 1994〕・〔中山ほか 2000〕・〔鈴木ほか 2012〕等を参考に実施し、部位・状態別に個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、一部の種実遺体を対象として、長さと幅、厚さをデジタルノギスで計測した結果を一覧表に併記する。同定後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、約 70% のエタノール溶液で液浸保存する。種実以外で確認された木材、炭化材、植物片、昆虫類等は、一覧表の下部に定性的な量比を +（プラス）で示し、ポリ袋に入れて保管する。

#### c) 樹種同定

剃刀を用いて木口（横断面）・極目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作成し、ガム・クローラル（抱木クローラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、〔鳥居・伊東 1982〕・〔Wheeler 他 1998〕を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、〔林 1991〕・〔伊東 1995; 1996; 1997; 1998; 1999〕を参考にする。

### C 結果

#### a) 花粉分析

結果を第 13 表、第 19 図に示す。花粉化石はいずれの試料からも豊富に産出するが、保存状態は全体的にやや悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く含まれる。

w 1 付近、Loc. 3 試料番号 15 は、いずれも花粉化石群集が類似し、木本花粉が優占する。また、シダ類胞子も多く認められる。木本花粉は、2 試料ともにブナ属、トチノキ属が多産し、マツ属、サワグルミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。草本花粉は、少ないながらもガマ属、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属などが認められる。

#### b) 種実遺体の抽出・同定花粉分析

結果を第 14 表に示す。また、種実遺体各分類群の写真を写真図版 13、一部の計測値を第 14 表に示して同定根拠とする。

Loc. 3 の試料番号 8, 9, 15 の 3 試料を通じて、被子植物 15 分類群（落葉広葉樹のクワ属、ホオノキ、サルナシ近似種、マタタビ近似種、キハダ、ウルシ属、トチノキ、タラノキ、ムラサキシキブ属、ニワトコ、草本のツチアケビ、タデ属、ウド、オカトラノオ属、シロネ属）113 個の種実遺体が同定された。1 個は同定ができなかった。種実以外では、木材、炭化材、植物片、昆虫類等が確認された。

種実遺体の出土個数は、試料番号 15 が 89 個と最も多く、試料番号 9 が 14 個、試料番号 8 が 10 個であった。

木本種実は全て落葉広葉樹で、高木になる河畔林要素のトチノキや、河畔や林縁などの明るく開けた場所に生育する高木のクワ属、ホオノキ、キハダ、高木または低木のウルシ属、低木のタラノキ、ムラサキシキブ属、ニワトコ、藤本のサルナシ近似種、マタタビ近似種などが確認された。草本種実は、試料番号 15 でのみ確認され、腐生植物のツチアケビ、湿生植物のシロネ属や、やや乾いた場所にも生育可能な中生植物のタデ属、ウド、オカトラノオ属が確認された。以下に、試料別出土状況を述べる。

##### i) 下部有機質土壌 (Loc. 3 試料番号 8・9)

試料番号 8（試料 100cc : 147g）からは、高木のクワ属が 9 個、藤本のマタタビ近似種が 1 個と、不明 1 個が確認された。試料番号 9（試料 50cc : 73g）からは、高木のキハダが 1 個、トチノキの果皮片が 12 個、種子が 1 個確認された。分析残渣は、両試料とも植物片を主体とし、昆虫類も少量確認された。

## ii) 上部有機質土壌 (Loc. 3 試料番号 15)

試料番号 15 (試料 200cc; 220g) からは、木本は、高木のクワ属が 2 個、ホオノキが 1 個、キハダが 8 個、高木または低木のウルシ属が 4 個、低木のタラノキが 37 個、ムラサキシキブ属が 3 個、ニワトコが 1 個、藤本のサルナシ近似種が 5 個、マタタビ近似種が 9 個の、計 70 個が確認された。草本は、腐生植物のツチアケビが 1 個、中生植物のタデ属が 1 個、ウドが 1 個、オカトラノオ属が 15 個、湿生植物のシロネ属が 1 個の、計 19 個が確認された。

## c) 樹種同定

同定結果を第 15 表に示す。西向きおよび南向き露頭より出土した木材は、広葉樹 4 分類群 (クリ、ニレ属、トチノキ、ハリギリ) に同定された。

以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

## ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は 3~4 列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15 細胞高。

・ニレ属 (*Ulmus*) ニレ科

環孔材で、孔圈部は 1~2 列、孔圈外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に帯状あるいは紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~6 細胞幅、1~40 細胞高。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

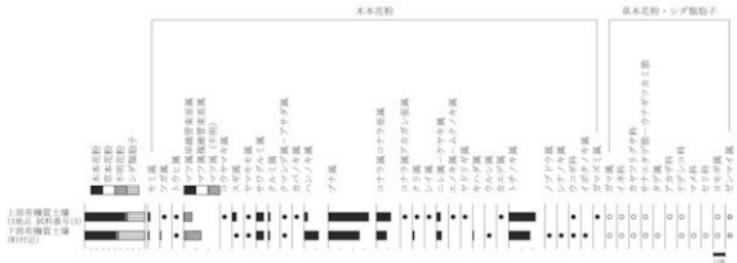
散孔材で、道管は單独または 2~3 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、單列、1~15 細胞高で層階状に配列する。

・ハリギリ (*kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai) ウコギ科ハリギリ属

環孔材で、孔圈部は 1~2 列、孔圈外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性~同性、1~5 細胞幅、1~30 細胞高。柔組織はターミナル状および周囲状。

第13表 花粉分析結果

種類	下部 有機質 土壌		上部 有機質 土壌
	西向き露頭 w1付近	Loc. 3 15	
<b>木本花粉</b>			
モミ属	3	8	
ツガ属	3	4	
トウヒ属	1	1	
マツ属單細管束胚属	—	4	
マツ属複複管束胚属	4	8	
マツ属(不明)	34	16	
コウジマキ属	—	2	
スギ属	2	15	
ヤマモモ属	1	1	
サワグルミ属	17	26	
クルミ属	4	7	
クマシゲ属—アサザ属	1	3	
カバノキ属	—	1	
ハンノキ属	32	12	
ブナ属	69	137	
コナラ属コナラ胚属	23	49	
コナラ属カガシ胚属	—	1	
クリ属	4	2	
シイ属	—	1	
ニレ属—ケヤキ属	11	14	
エノキ属—ムクノキ属	—	1	
ヤドリギ属	—	1	
キハダ属	3	—	
ウルシ属	1	—	
カバダ属	—	1	
トチノキ属	47	91	
ノブドリ属	2	—	
シナノキ属	1	—	
ウコギ科	1	1	
イボタノキ属	1	—	
ガマズミ属	—	1	
<b>草本花粉</b>			
ガマ属	3	1	
イネ科	2	2	
カヤクグリ科	1	3	
サナクダ節—ウナギツカミ	2	2	
タブ属	1	—	
アカザ科	—	1	
ナデシコ科	1	1	
マメ科	1	—	
セリ科	1	—	
ヨモギ属	1	2	
<b>不明花粉</b>			
不明花粉	5	14	
<b>シダ類孢子</b>			
ゼンマイ属	5	1	
他のシダ類孢子	222	175	
<b>合計</b>			
木本花粉	265	408	
草本花粉	13	12	
不明花粉	5	14	
シダ類孢子	227	176	
合計(不明を除く)	505	599	



第 19 図 花粉化石群集

#### D 考察

西向き露頭 (Loc. 3) に確認された下部と上部の 2 層準の有機質土壤は、同層より出土した種実遺体の放射性炭素年代測定の結果、それぞれ縄文時代後期後半および縄文時代晚期後半頃と推定された。上述したように、岩田原遺跡が載る段丘面は完新世に対比されており、この所見とも整合する。また、Loc. 3 に認められた堆積層の観察所見からは、氾濫原および侵食堆積を繰り返す河床域のような不安定な領域が継続しており、この間の比較的安定した時期や相対的に低所 (凹地) となる領域に有機質土壤や腐植質土壤が形成されたことが推定された。

上記した上・下部有機質土壤を対象とした花粉分析の結果、いずれの層準からもブナ属やコナラ亜属が多く産出した。これらは、本地域の冷温帶性落葉広葉樹林の主要構成要素であることから、周囲の山地や丘陵などに成立した森林植生を反映すると考えられる。この他に多く産出したトチノキをはじめ、サワグルミ属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属などは渓谷林や河畔林を構成する種群であり、クルミ属、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、エノキ属-ムクノキ属、シナノキ属なども同様である。その他、針葉樹のスギ属も、沢沿いや湧水地などに林分を形成することから、同様に河畔や低湿地などに生育した可能性があり、マツ属は生育環境の適応範囲が広く、極端な陽樹であることから二次林などとして周囲に分布していた可能性がある。

次に、種実遺体の状態についてみると、種実遺体群は上部有機質土壤より多く得られ、落葉広葉樹を主体とする組成を示した。下部有機質土壤 (Loc. 3 試料番号 8, 9) は、高木のトチノキ、クワ属、キハダ、藤本のマタタビ近似種などの落葉広葉樹が確認され、上部有機質土壤 (Loc. 3 試料番号 15) は、高木のクワ属、ホオノキ、キハダ、高木または低木のウルシ属、低木のタラノキ、ムラサキシキブ属、ニワトコ、藤本のサルナシ近似種、マタタビ近似種などの落葉広葉樹を主体とし、落葉樹林下またはササの群落中に生育する地生の無葉緑腐生植物のツチアケビや、湿生植物のシロネ属、やや乾いた場所にも生育可能な中生植物のタデ属、ウド、オカトラノオ属などの草本類が確認された。また、本材試料では、現地性が高いと考えられる立木様の木材 (w1) が落葉広葉樹のトチノキ、木材 (w7) がニレ属に同定された。その他の上述した 3 層の基底や 3 層中より出土した木材には、二次林などに生育する落葉高木のクリ、河畔などに生育する落葉高木のトチノキやハリギリが確認された。

第14表 微細分析結果

分類群	部位	状態	Loc. 3			主な種実遺体の 計測値(mm)	備考
			下部 有機質土壌		上部 有機質 土壌		
			8	9	15		
木本							
クワ属	核	完形	7	-	2	-	-
		破片	2	-	-	-	-
ホオノキ	種子	破片	-	-	1	9.4	11.2
サルナシ近似種	種子	完形	-	-	1	-	-
		破片	-	-	4	-	-
マタタビ近似種	種子	完形	-	-	3	-	-
		破片	1	-	6	-	-
キハダ	種子	破片	-	1	8	-	-
ウルシ属	核	完形	-	-	4	3.1	4.4
						3.0	3.8
						3.1	3.5
						2.5	2.7
トチノキ	果実	破片	-	12	-	32.5	-
	種子	完形	-	1	-	26.9	32.0
タラノキ	核	完形	-	-	27	-	-
		破片	-	-	10	-	-
ムラサキシキブ属	核	完形	-	-	3	-	-
ニワトコ	核	破片	-	-	1	-	-
草本							
ツチアケビ	種子	完形	-	-	1	1.0	0.7
タデ属(3稜平滑型)	果実	完形	-	-	1	-	-
ウド	核	完形	-	-	1	-	-
オカトラノオ属	果実	完形	-	-	15	-	-
シロネ属	果実	完形	-	-	1	-	-
不明		完形	-	1	-	-	-
種実合計							
木本種実			10	14	70	-	-
草本種実			-	-	19	-	-
不明			1	-	-	-	-
合計(不明を除く)			10	14	89	-	-
分析残渣(同定対象外)						-	-
不明植物片			+	+	-	-	-
木材			-	-	+	-	-
炭化材			-	-	+	-	-
植物片			++	++	++	-	-
昆虫類			+	+	+	-	-
分析量	容積(cc)		100	50	200	-	-
	重量(g)		147	73	220	-	-

第15表 樹種同定結果

試料名	出土位置	出土状況	形状	大きさ (cm)	種類 (分類群)
w1	西向き露頭	樹幹・根株様		上面:長さ38×幅30	トチノキ
w2	西向き露頭	倒木・流木様		(>半径14)	クリ
w3	西向き露頭	側木・流木様	芯持丸木	径26×20	クリ
w4	西向き露頭	倒木・流木様	芯持丸木	径21×14	トチノキ
w5	西向き露頭	倒木・流木様		(>半径12)	ハリギリ
w6	西向き露頭	倒木・流木様	芯持丸木	径30×22	ハリギリ
w7	南向き露頭	樹幹・根株様		(>半径25)	ニレ属

花粉群集組成では、山地や丘陵などの森林植生に由来すると考えられるブナ属やコナラ亜属を除くと、河畔などに生育する種類が多く認められる傾向にある。各試料の河畔林要素となる分類群のうち、花粉が多く産出したトチノキは種実 (Loc. 3 試料番号9) や木材 (w1) にも確認されており、花粉が認められたニレ属-ケヤキ属もニレ属の木材 (w7) が確認されている。このような状況から、トチノキやニレ属などの樹種を含む林地が調査地周辺に形成されていたと推定される。また、これらの林地には、花粉化石や種実遺体に認められた河畔林要素や林縁要素となる落葉の高木類 (サワグルミ属、クルミ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、クワ属、ホオノキ、キハダなど) や中～低木類 (タラノキ、ニワトコ、ムラサキシキブ属など)、藤本類 (サルナシ近似種やマタタビ近似種、ノブドウ属)、草本類のツチアケビなどが、さらに林縁や明るく開けた場所にはタデ属、ウド、アカザ科、マメ科、ヨモギ属、オカトラノオ属などの草本類が生育していたと考えられる。また、水湿地などの水辺には木本類のハンノキ属や草本類のガマ属、カヤフリグサ科、セリ科などが分布していたと推定される。なお、3層基底および3層中から出土した木材に認められたクリ、トチノキ、ハリギリ (ウコギ科) などは花粉群集組成においても認められている。おそらく、これらは調査地付近をはじめ、渋海川および支流河川流域に分布した林分に生育した樹種に由来すると考えられる。

## 第VI章　まとめ

### 1 はじめに

今回の調査では、弥生時代から近世初期までの遺物が出土したが、弥生時代の遺物が最も多く、土器・石器を合わせると、出土点数の半数以上を占めている。弥生土器のうち、型式が同定できたのは宇津ノ台式と砂山式であり、弥生時代中期後葉から後期前葉という時期に絞られる。石器についても、おおよそこの土器群に伴うものと考えるのが妥当だろう。したがって、この時期における岩田原遺跡の在り方について整理し、報告のまとめとする。

### 2 遺跡の形成と立地

西向き露頭のLoc. 3における下部有機質土壤（縄文時代後期後半）と上部有機質土壤（縄文時代晚期後半）、及びここから得られた植物遺存体は、周辺の地形と植生について重要な情報を提供してくれた。当地は、一部土壤化した場所に、トチノキ・サワグルミ属などが渓谷林や河畔林を形成していた様子が示されているものの、氾濫原や河床域、湿地のような不安定な領域でありつけ、安定した陸地となったのは、調査区で確認された最後の氾濫原堆積物であるIV層堆積以降となる。したがって、岩田原遺跡より一段高い台地に営まれた坊屋敷遺跡（縄文時代晚期）や、中位段丘上に立地する延命寺ヶ原遺跡（縄文時代後期～晚期）は、河川の影響を受ける不安定な領域を避けて適地された遺跡（集落）だと考えられる。今回の分析結果を小国盆地に敷衍すると、低位段丘上に縄文時代の遺跡が発見されていない理由が理解できる。

IV層堆積後、遺跡周辺は完全に離水し、その上に新しい腐食土層（Ⅱ層～Ⅲ層）が堆積する。この時期、弥生時代中期後葉～後期前葉にかけて、この場を利用したのが東北系土器群を有する集団であった。この所謂天王山式を出土する遺跡の立地は非常に多様で、田中〔1990〕によれば①岩陰、②海浜・砂丘、③沖積地中の微高地、④比高20 m以上の丘陵・台地、⑤比高20 m以下の丘陵・台地に5大別されるが、当時の岩田原遺跡の立地は、③沖積地中の微高地、に近い様相だったと思われる。

### 3 遺構と場の利用

弥生時代の遺物を明確に伴った遺構は、UG 1・P 9・SK 2・SK 3の4基である。天王山式の遺跡では、しばしば浅い土坑中に単体もしくは複数個体の復元可能な土器の出土が報告されている。県内では八幡山遺跡（新潟市）のSX 1006が知られ、「彌形土器2個体を用いた土器棺墓」と考えられている〔新潟市教委2001〕。当遺跡のSK 2・SK 3は、土器の残存状況が非常に悪く、しかも宇津ノ台式・砂山式の両方が出土しているが、この葬制が中期後半に遡り得るという見解〔石川1999〕があることから、これに類するものと考えたい。UG 1は、Ⅲ層からIV層中に正位の状態で埋められた埋設土器であり、田上町中店遺跡における「彌形土器」の出土状態に良く似ている。中店遺跡例は、地山である「Ⅲa層へ切り込んだ状態」で、「直立し」て出土したもので、墓地的性質をもつと判断されている〔田上町教委1976〕。加えて、P 9は、明確な掘り込みを確認できなかったものの、土器の集中、鍬とアメリカ式石錐の出土状況、そして炭化物のまとまりという在り方により、発掘調査時点から墓と捉えていた遺構である。このように見えてくると、分布密度こそ高くはないが、調査区域が墓域として利用されていたと推測される。包含層（B 8-2グリットⅢ層）中で検出した勾玉（国版12-65）も、これら墓坑と関連する可能性がある。

遺跡から多数発見されたビット類は、性格不明なもの、帰属時期の不明なものが多く、柱穴と思われるものにも配列が認められなかった。柱穴は、その形態・規模から古代・中世に属すると推測され、溝状遺構 S D 2・S D 3 も同様の年代に帰属する可能性が高い。調査区から国道 404 号線を挟んで東側、試掘トレンチ 94 T 周辺には 9 世紀後半～10 世紀前半の遺構・遺物分布域があり、調査区はその西縁と理解される。つまり、弥生時代中期後葉～後期前葉における明確な居住域を検出できなかこととなる。

その一方で、出土した石器群から受ける遺跡の印象はやや異なる。調査区からは石核準備段階から剥片生産・二次加工、そして使用という各段階の石器が得られている。接合資料による石器製作工程の復原には至らなかったものの、遺跡において石器が製作され、使用されたと考えられる。定形石器がごく少量で、剥片類が 8 割近くを占め、さらにその半数以上が二次加工剥片・使用痕のある剥片である状況、そしてその石材は、頁岩・チャートほか、現在でも遺跡周辺で採集可能な在地石材がほとんどであることも考慮すると、臨機的に石器が製作・使用された場だと考えられる。このような石器の在り方と、遺構から想起される墓域としての性格が同時代性を有するのか、それぞれ短期間に営まれた行動の混在と捉えるのか、あるいは別の解釈を用意すべきであるのか、その判断は今後の課題としたい。

#### 4 土器群の様相

かつて字津ノ台式や砂山式等東北系土器は、単独で発見されることが多かった。しかし、発掘調査の行われた遺跡では、しばしば北陸系や中部高地系と併存する状況が見受けられる。岩田原遺跡から約 700 m 北に位置する水上遺跡（第3図20）は弥生時代中期後半に営まれた遺跡で、中部高地系の栗林式と北陸系の小松式が出土している〔小国町教委 2004〕。笹澤〔2009〕によれば、字津ノ台式の影響を思わせる甕もあるものの、東北系はごく少数に留まるようである。また、立矛遺跡（第3図2）においては、弥生時代中期では小松式が大半を占め、そこに栗林式と字津ノ台式が少量含まれるという構成であり〔長岡市教委 2011〕、後期では大半を天王山式が占めるようになる。一方、松ノ脇遺跡〔旧和鳥村〕では、北陸系を中心に、中部高地系と東北系も一定量ずつ含まれるという状況である〔和鳥村教委 1989〕。このように、地域の中における、あるいは遺跡の中における各系統のあり方は非常に複雑な状況を示している。

これは単に土器群の系統別の割合の問題だけではなく、個体土器のレベルにおける異系統型式の影響関係の問題でもあり、さらに遺構の種別も含めた問題にも関係するのだろう。そうした中にあって、本遺跡で出土した土器は東北系で占められ、土器棺墓やアメリカ式石縫という天王山式に特徴的な遺構・遺物も確認されおり、比較的に単純な様相をみせている。

#### 5 遺物の年代

S K 2 出土土器（図版8-19）は、字津ノ台式に分類したものであるが、AMS 年代測定の結果 2,052 ± 26yrBP という値を得た。弥生時代の年代観は現在諸説あるが、中期と後期の境を紀元前後する見解〔今村・設楽 2011〕と矛盾がない。ただし、S K 2 からは字津ノ台式に分類した一群と、砂山式に分類した一群が出土しているという問題がある。S K 2・S K 3・P 9 から出土した土器は、ほぼ同一レベルでまとまっている、調査者としては一括資料と認識される。つまり、出土状況と型式学的所見とに齟齬が生じている。破片資料の限られた情報から識別したため、後続型式（この場合は砂山式）に残存した古い要素をもって先行型式（字津ノ台式）と分類したか、あるいは一括ではなく混在であるか、その判断は近接地域における良好な資料の出土を待って下したい。

## 註

- 註 1 従来用いられていた標高別の通称に従うと、延命寺ヶ原道路の Gt IV は「中位段丘」に、岩田原集落の Gt V は「低位段丘」に、本道路の Gt VI は「沖積地」に相当する。
- 註 2 土壤の繊りと粘性については、5段階区分で表記した。繊り、粘性とも 1 が最も悪く（弱く）、5 が最も良い（強い）。図版中の表記もこれによっている。
- 註 3 砂山式は、野田豊文らによる細分〔瀧沢・野田ほか 2003〕をもとに、石川日出志〔2004〕が提唱した天王式の地方型式である。天王式については様々な見解が表明されており、未だ決着を見ていないところであろうが、本書では多くの文献を参考しながらも、特に野田氏らによる論文を参考にした。東北系の土器を中心に、破片資料を含む非常に多くの資料が団化、分類、紹介され、細分の試みがなされていたからである。また、用語についても石川〔2004〕や野田〔2009〕の砂山式を用いることとした。
- 註 4 この 5 の土器で観察されたナデは、通常の指や布を用いたナデとは違い、確かに凹凸のあるヘラ状の工具平坦面によって土器表面を浅くナデしたもので、かつ典型的なハケメとも異なるものであることから、表現に苦慮した。しかし、特殊な調整ではないことを重視し、ここでは単に「ナデ」と表現することとした。
- 註 5 註 4 に同じ。

## 引用参考文献

- 石川茂雄 1994 「原色日本植物種子写真図鑑」 石川茂雄図鑑刊行委員会 328 頁。
- 石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の諸問題」「北越考古学」3 北越考古学研究会 1-20 頁。
- 石川日出志 1999 「弥生時代の墓と墓地 弥生時代・古墳時代」 新潟県考古学会編『新潟県の考古学』高志書院 265-268 頁。
- 石川日出志 2000 「南御山2号土器の成立と小松式土器との接觸」「北越考古学」11 北越考古学研究会 1-22 頁。
- 石川日出志 2004 「弥生時代後期天王山式土器成立期における地域関係」「駿台史学 第120号」 47-66 頁。
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料31」 京都大学木質科学研究所 81-181 頁。
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料32」 京都大学木質科学研究所 66-176 頁。
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料33」 京都大学木質科学研究所 83-201 頁。
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料34」 京都大学木質科学研究所 30-166 頁。
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料35」 京都大学木質科学研究所 47-216 頁。
- 今村泰雄・設楽博巳 2011 「出土品14年の記録から見た自然環境」 設楽博巳・藤尾慎一郎・松本武彦編『弥生時代の考古学3 多様化する弥生文化』 同成社 48-69 頁。
- 小国町教育委員会 1969 「延命寺ヶ原道路発掘調査報告書 織文時代の延命寺ヶ原」 小国町 1-4 頁。
- 小国町教育委員会 1985 「御館一発掘調査報告書」 小国町教育委員会
- 小国町教育委員会 2000 「新潟県刈羽郡小国町埋蔵文化財調査報告書第3集 浦田道路発掘調査報告書」 小国町教育委員会
- 小国町教育委員会 2003 「新潟県刈羽郡小国町埋蔵文化財調査報告書第4集 御館道路Ⅱ」 小国町教育委員会
- 小国町教育委員会 2004 「第一先道路」 小国町教育委員会
- 小国町教育委員会 2004 「新潟県刈羽郡小国町埋蔵文化財調査報告書第5集 水上道路」 小国町教育委員会
- 小千谷市教育委員会 1990 「小千谷市文化財報告書第4集 市内道路詳細分布調査報告書」 小千谷市教育委員会
- 柏崎市教育委員会 1985 「柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5号 刈羽大平・小丸山 東北電力新潟原子力発電所建設地内埋蔵文化財発掘調査報告」 柏崎市教育委員会
- 神林村教育委員会 1991 「神林村埋蔵文化財報告第3 長松道路発掘調査報告書」 神林村教育委員会

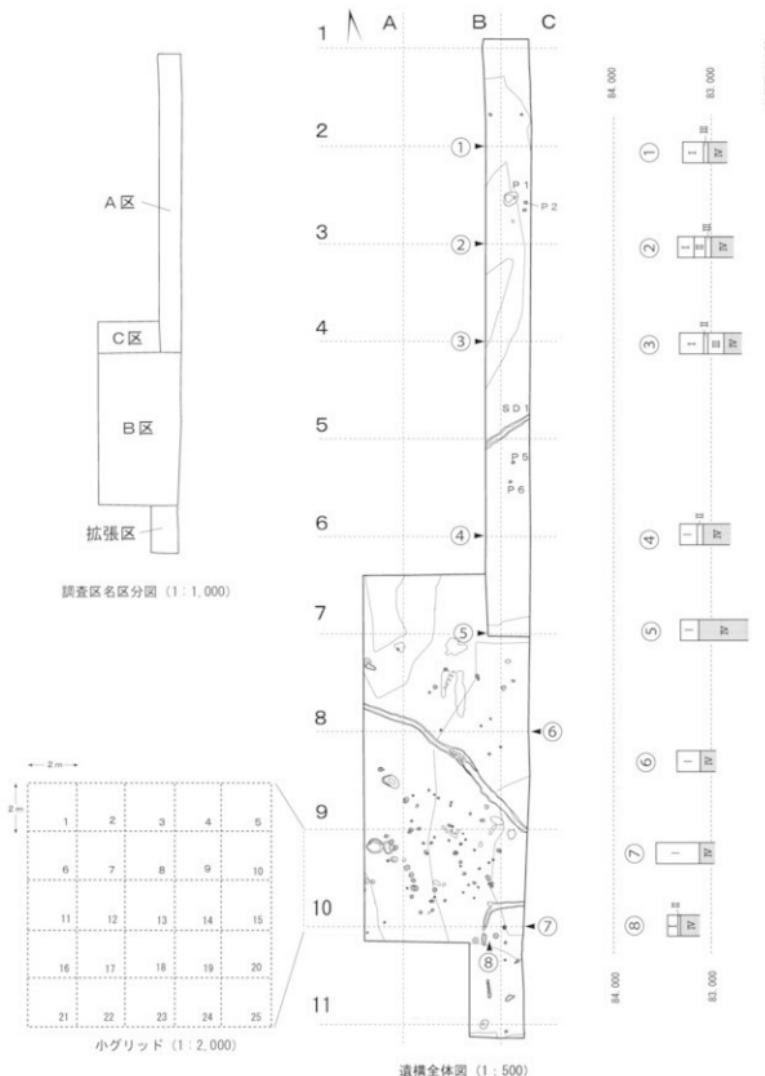
- 京ヶ瀬村教育委員会 2003 「京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 県営渓水防除事業関連遺跡発掘調査報告」 大割遺跡・獣山遺跡・大曲川端遺跡」 京ヶ瀬村教育委員会
- 越路町編 1998 「越路町史」 資料編I 原始・古代・中世 越路町教育委員会
- 越路町教育委員会 1970 「越路原縦合調査報告書 朝日百塚・並松遺跡」 越路町教育委員会
- 越路町教育委員会 1983 「越路町文化財調査報告書第9輯 中山道跡発掘調査報告書」 越路町教育委員会
- 越路町教育委員会 1983 「越路町文化財調査報告書第11輯 中山道跡第2次発掘調査報告書」 越路町教育委員会
- 越路町教育委員会 1992 「越路町文化財調査報告書第19輯 岩田遺跡」 越路町教育委員会
- 越路町教育委員会 1997 「越路町文化財調査報告書第21輯 岩田遺跡 第二次発掘調査報告書」 越路町教育委員会
- 越路町教育委員会 2000 「越路町文化財報告書第22輯 上屋敷遺跡発掘調査報告書」 越路町教育委員会
- 小林謙一 2008 「織文土器の年代(東日本)」 小林達雄編「絶観織文土器」アム・プロモーション 896-903頁。
- 小林謙一 2009 「近畿地方以東の地域への伝承」 西本豊弘編「弥生農耕のはじまりとその年代 新弥生時代のはじまり」 第4巻 55-82頁。
- 小松市教育委員会 2003 「八日市地方遺跡」—小松駅東上地区調整事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書— 小松市
- 並澤正史 2009 「新潟県出土の栗林式土器」 新潟県考古学会20周年記念論集刊行委員会編「新潟県考古学会設立20周年記念論文集 新潟県の考古学」 新潟県考古学会 267-288頁。
- 鳥倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態 大阪市立自然博物館収蔵目録第5集」 60頁。
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」 地球社 176頁。
- Wheeler E.A., Bass P. and Gaszon P.E. (編) 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社 122頁。 [Wheeler E.A., Bass P. and Gaszon P.E., 1989, IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]
- 鈴木郁夫 1988 「地形分類図」「土地分類基本調査 国野町」 新潟県農地部農村整備課 13-32頁。
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文 2012 「ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一日でわかる植物の種子と果実632種-」 漢文堂新光社 272頁。
- 岡 雅之 2013 「新潟県における織文・弥生時代ヒスイ勾玉の一考察—織文勾玉の形態と弥生勾玉の生産及びヒスイ产地の玉問題—」『新潟考古』第24号 新潟県考古学会 61-80頁。
- 田上町教育委員会 1976 「まとめ」『田上町文化財調査報告第1輯 中店遺跡』 田上町教育委員会 14-15頁。
- 浦沢規則・野田豊文はか 2003 「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相―1村上市移山遺跡・瀬ノ前遺跡を中心―」『三面川流域の考古学』 第2号 奥三面川を考える会 45-117頁。
- 田中 純 1988 「北陸における天王山式土器」『新潟考古学談話会会報』第2号 新潟考古談話会 5-8頁。
- 田中 純・丸山一昭 1999 「中期後半 弥生時代・古墳時代」 新潟県考古学会編「新潟県の考古学」 高志書院 232-235頁。
- 田中 純 1990 「北陸地方の天王山式土器」 弥生時代研究会編「天王山式期をめぐって」の検討会 記録集】 弥生時代研究会
- 東北中世考古学会第5回研究集会事務局 1999 「東北地方の中世出土貨幣」 東北中世考古学会
- 長岡市教育委員会 2006 「御館遺跡III」 長岡市教育委員会
- 長岡市教育委員会 2008 「長岡市埋蔵文化財調査報告書 潘畠遺跡ー市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー」 長岡市教育委員会
- 長岡市教育委員会 2010 「平成21年度長岡市内遺跡発掘調査報告書」 長岡市教育委員会 18-20頁。
- 長岡市教育委員会 2011 「平成22年度長岡市内遺跡発掘調査報告書」 長岡市教育委員会 14-16頁。

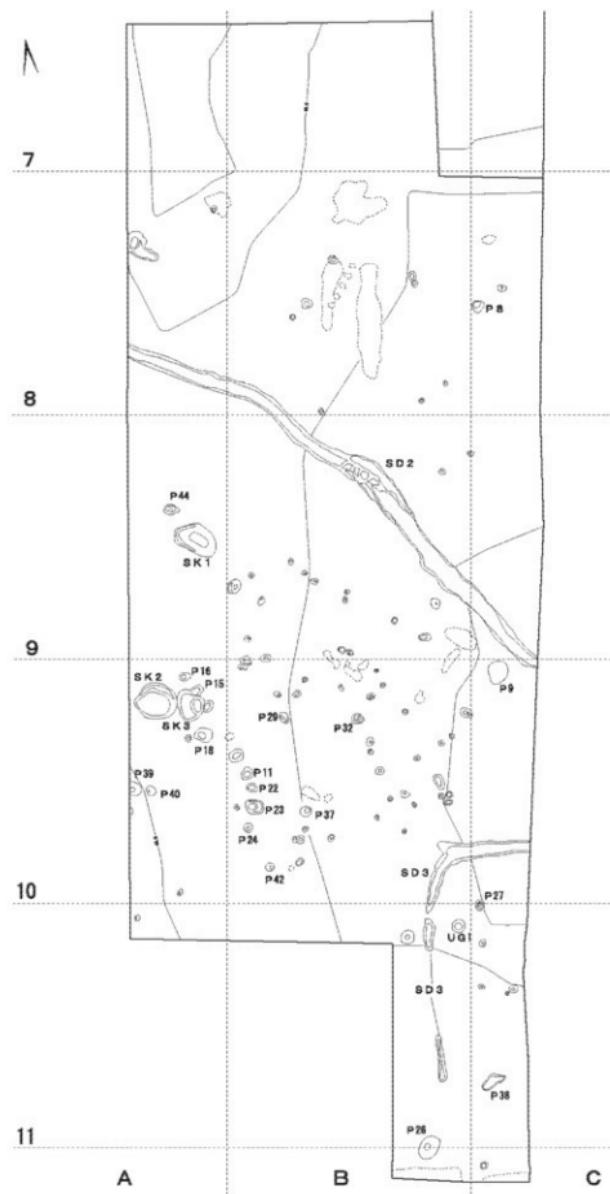
- 長岡市教育委員会 2011 「長岡市埋蔵文化財調査報告書 立矛遺跡一帯改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」 長岡市教育委員会
- 中船雅宏・中山勝博・百原 新・塚懶 実 2004 「中新統土岐口陶土層の堆積過程と産出する大型植物化石の水理的挙動 -岐阜県多治見市大利地区の例-」『地質学雑誌』110号 204-221頁。
- 中条町教育委員会 1998 「中条町埋蔵文化財調査報告書15集 兵衛遺跡・四ツ持遺跡-県営渓水防除事業に伴う発掘調査報告書I-」 中条町教育委員会
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標識 I・II (図版) 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第12・13集」 91頁。
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 「日本植物種子図鑑」 東北大学出版社 642頁。
- 新潟県教育委員会 1991 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡」 新潟県教育委員会
- 新潟県教育委員会 2001 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第100集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書I 松影A遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 新潟県教育委員会 1979 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第19 北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡」 新潟県教育委員会
- 新津市教育委員会 2001 「八幡山発掘調査報告書」 新津市教育委員会 28-48頁。
- 野田豊文 2009 「新潟県内の弥生時代後期東北系土器群像」 新潟県考古学会20周年記念論集刊行委員会編「新潟県考古学会設立20周年記念論文集 新潟県の考古学Ⅱ」 新潟県考古学会 289-304頁。
- 林 昭三 1991 「日本産木材 顯微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所
- 藤木利之・小澤智生 2007 「琉球列島産植物花粉図鑑」 アカアコーラル企画 155頁。
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子 2011 「日本産花粉図鑑」 北海道大学出版社 824頁。
- 吉岡康輔 1994 「珠洲および珠洲系陶器の研究-北東日本海域の中世陶器-」「中世須恵器の研究」 吉川弘文館 271-380頁。
- 渡邊裕之 1999 「弥生前期・中期前葉 弥生時代・古墳時代」『新潟県考古学会編 新潟県の考古学』 高志書院 227-231頁。

# 図 版

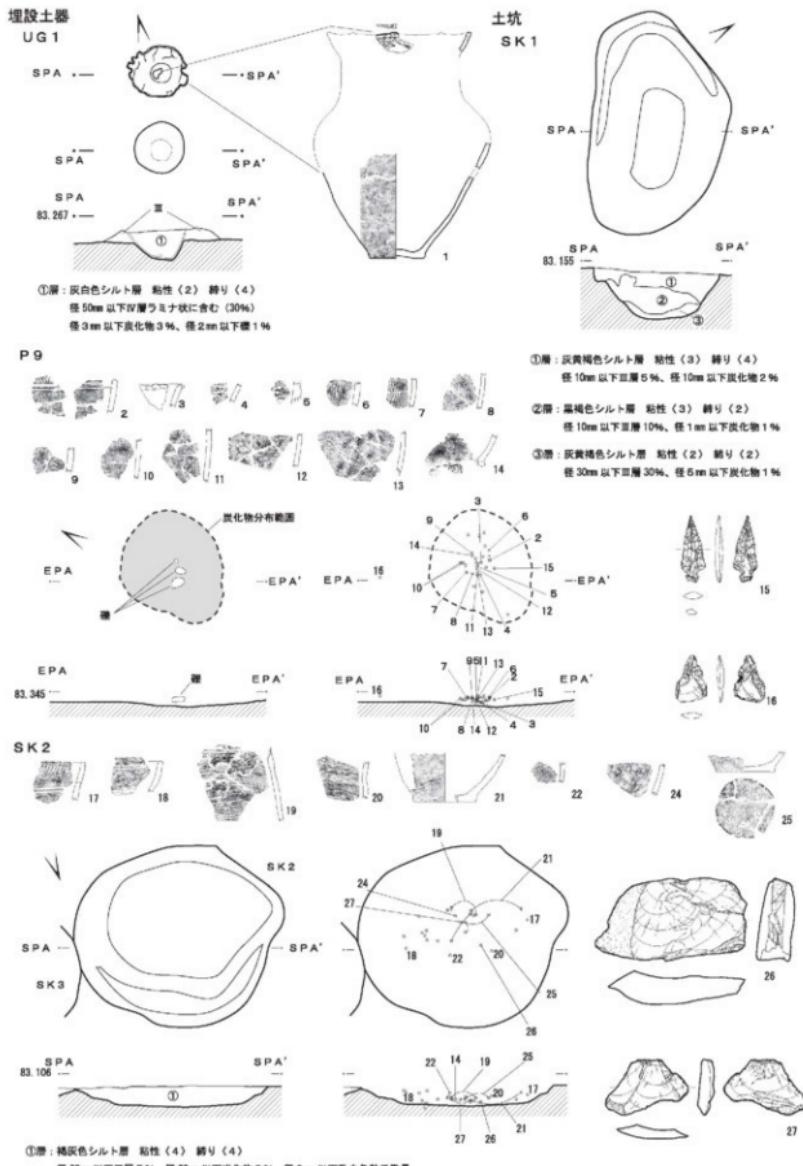
図 版 1

造構全体図・土層柱状図





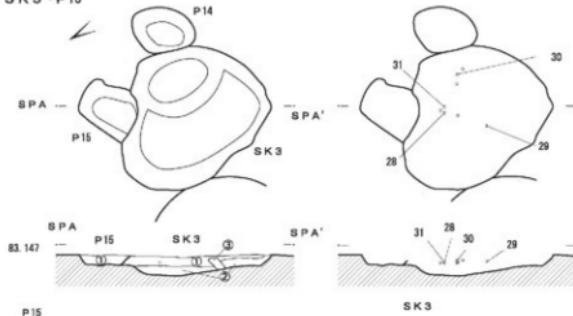
B区・C区・拡張区遺構図 (1:200)



遺構図 (1:40) 遺物図 (不同)

個別遺構図②

SK 3・P 15

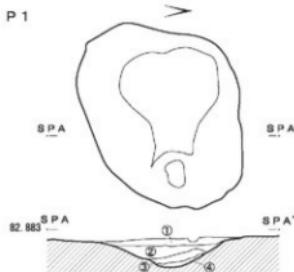


①層：高褐色シルト層 粘性（2） 繊り（3）  
径 20mm 以下Ⅲ層 3%、径 20mm 以下炭化物 3%、径 40mm 以下Ⅳ層 5%

②層：にぶい黄褐色砂層 粘性（1） 繊り（2）  
径 20mm 以下Ⅲ層 5%、径 20mm 以下炭化物 7%、径 1mm 以下Ⅳ層 2%

③層：灰白色シルト層 粘性（3） 繊り（3）  
径 1mm 以下炭化物 1%、径 3mm 以下Ⅳ層 2%

ピット



①層：高褐色シルト層 粘性（3） 繊り（4）  
径 20mm 以下Ⅲ層 7%、径 3mm 以下炭化物 1%

②層：明緑灰色砂まじりシルト層 粘性（1） 繊り（4）  
径 5mm 以下炭化物 1%、径 10mm 以下Ⅲ層粒子 20%

③層：高褐色シルト層 粘性（3） 繊り（4）  
径 20mm 以下Ⅲ層 10%、径 30mm 以下炭化物 7%

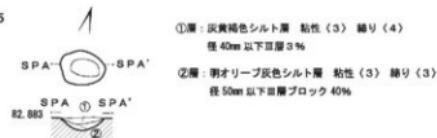
④層：明緑灰色シルト層 粘性（3） 繊り（3）  
径 20mm 以下炭化物 5%

P 2



①層：灰黄褐色シルト層  
粘性（3） 繊り（3）  
径 20mm 以下Ⅲ層 30%、  
径 5mm 以下炭化物 1%

P 5



①層：灰黄褐色シルト層 粘性（3） 繊り（4）  
径 40mm 以下Ⅲ層 3%

②層：モオリープ灰褐色シルト層 粘性（3） 繊り（3）  
径 50mm 以下Ⅲ層 ブロック 40%

P 6



①層：灰黄褐色シルト層  
粘性（1） 繊り（2）  
径 40mm 以下Ⅲ層 3%

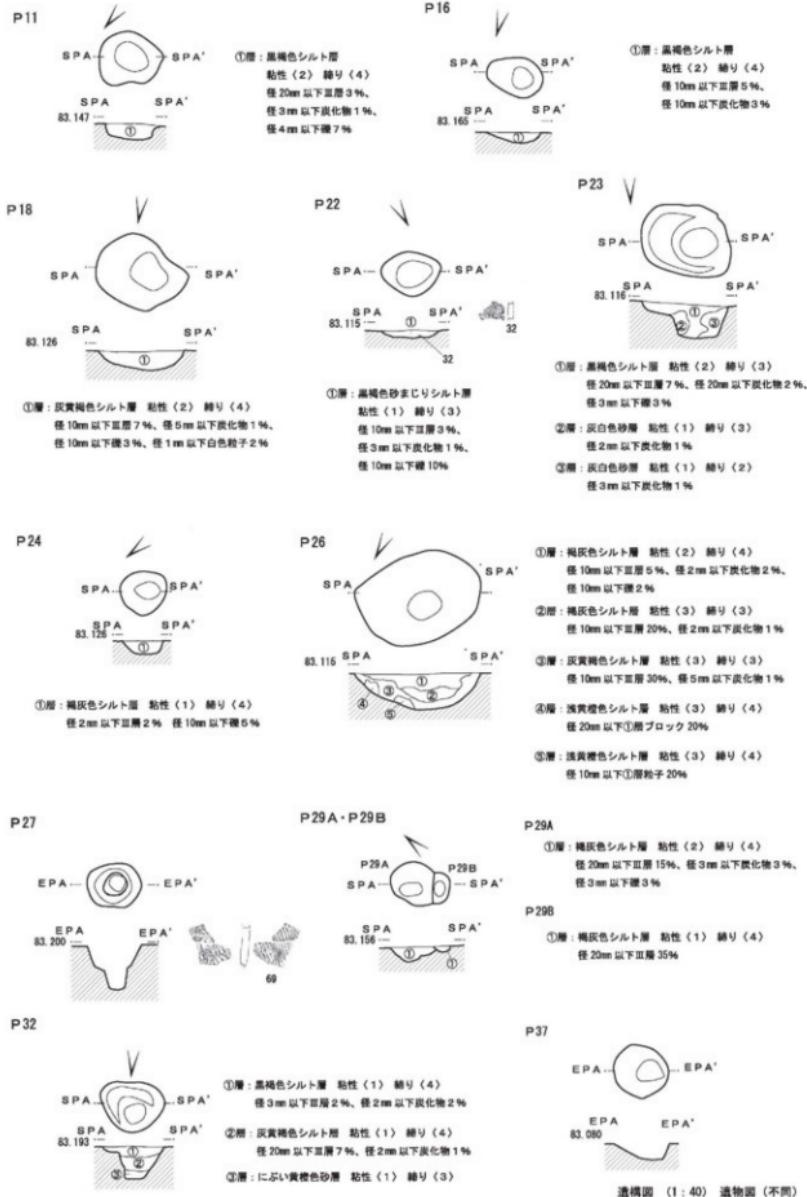
②層：モオリープ灰褐色シルト層  
粘性（3） 繊り（3）  
径 30mm 以下①層 ブロック 10%

P 8

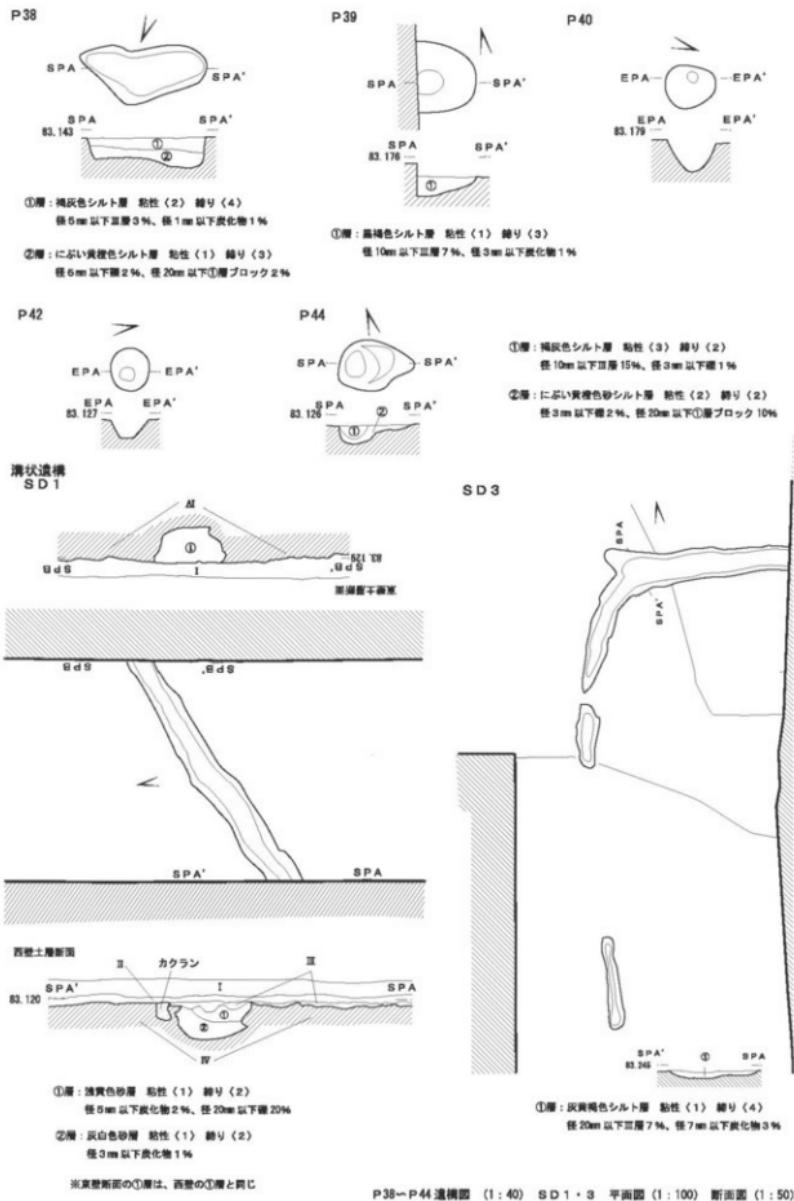


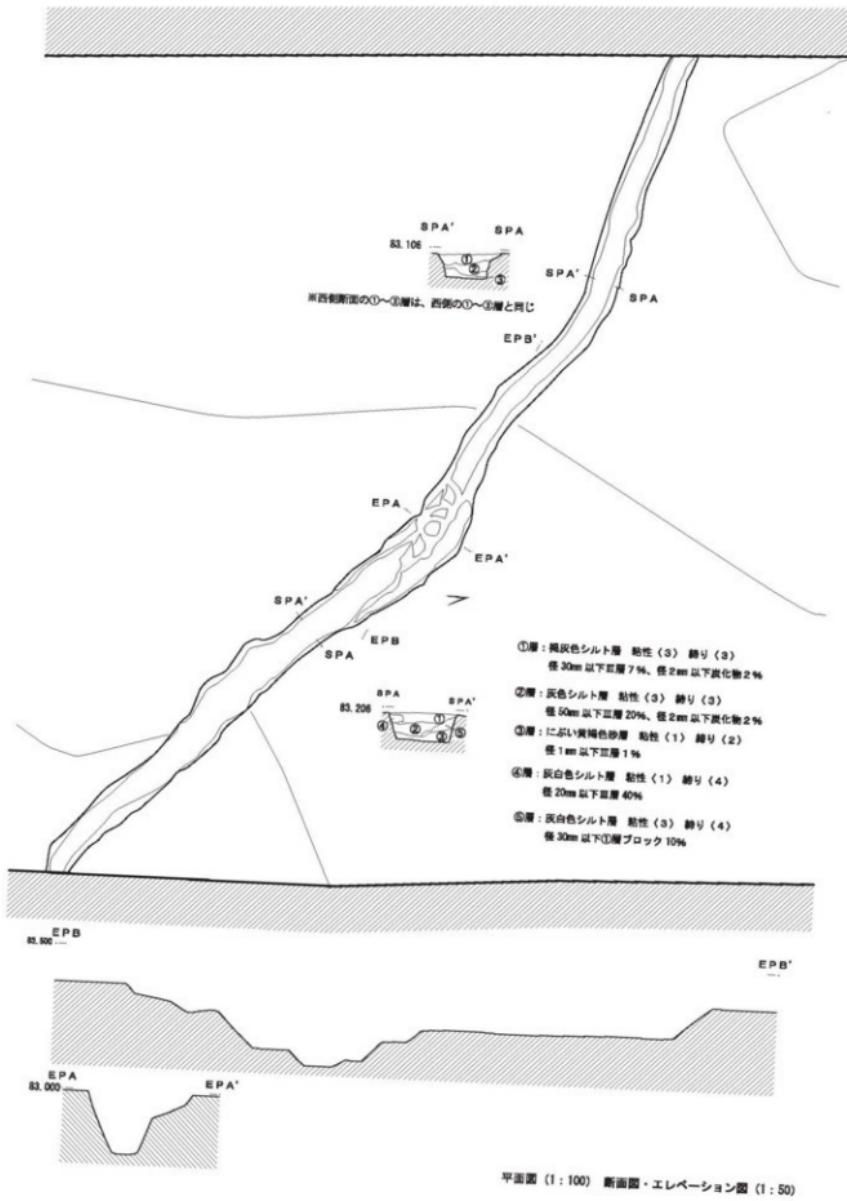
①層：高褐色シルト層  
粘性（1） 繊り（4）  
径 30mm 以下Ⅲ層 7%、  
径 5mm 以下炭化物 5%

②層：モオリープ灰褐色シルト層  
粘性（4） 繊り（2）  
径 30mm 以下①層 ブロック 40%



図版 6





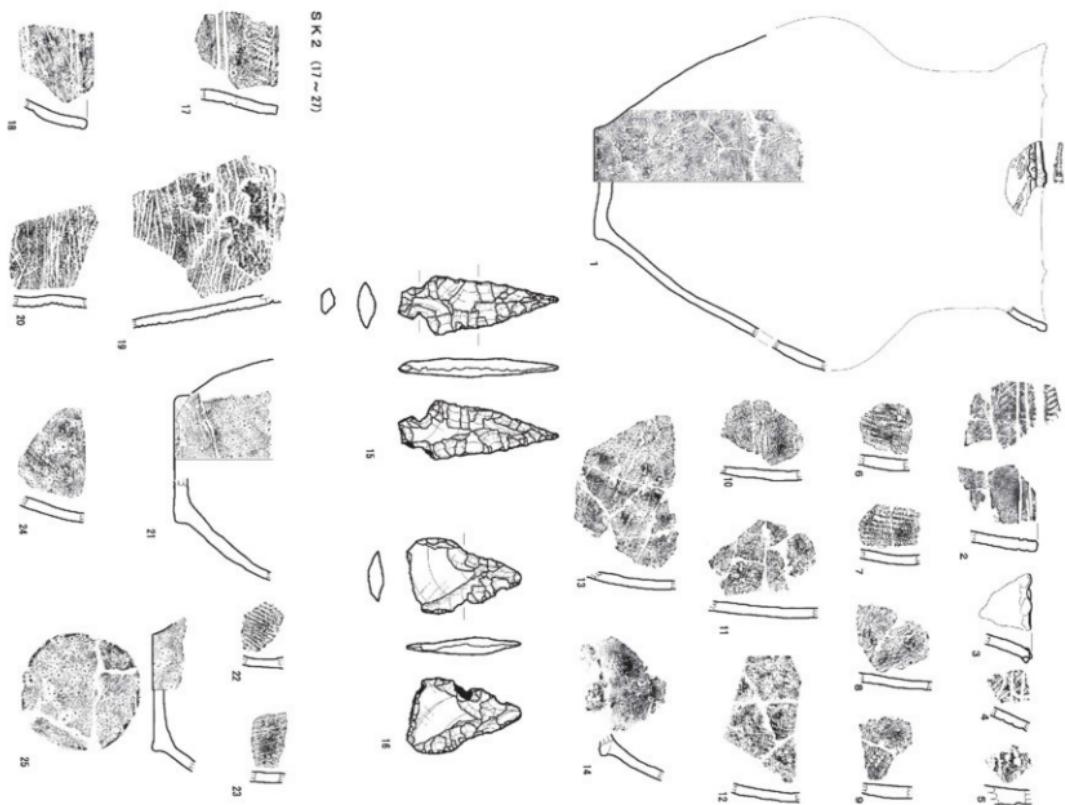
出土遺物図①

図版8

弥生時代の遺物

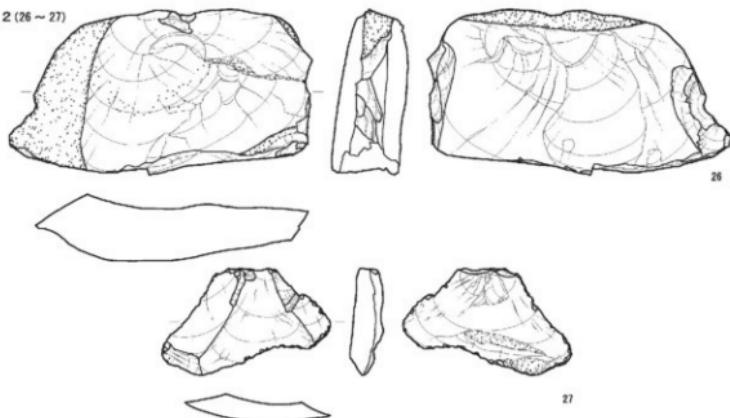
## 概要

UG 1 (1)

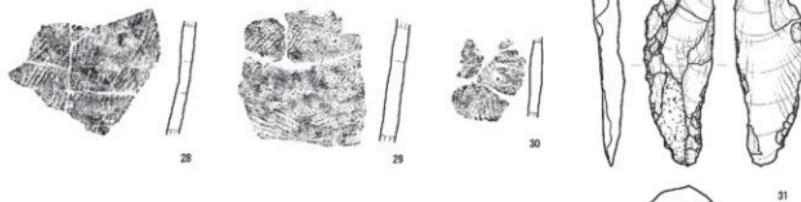
土坑  
P 9 (2~16)

1 (1~4) 2~14, 17~25 (1~3) 15~16 (4~5)

SK 2 (26~27)



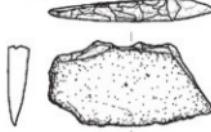
SK 3 (28~31)



P 22 (32)

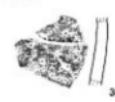


P 40 (33)

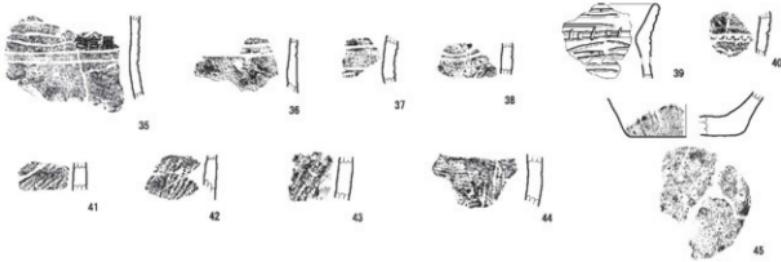


溝状遺構

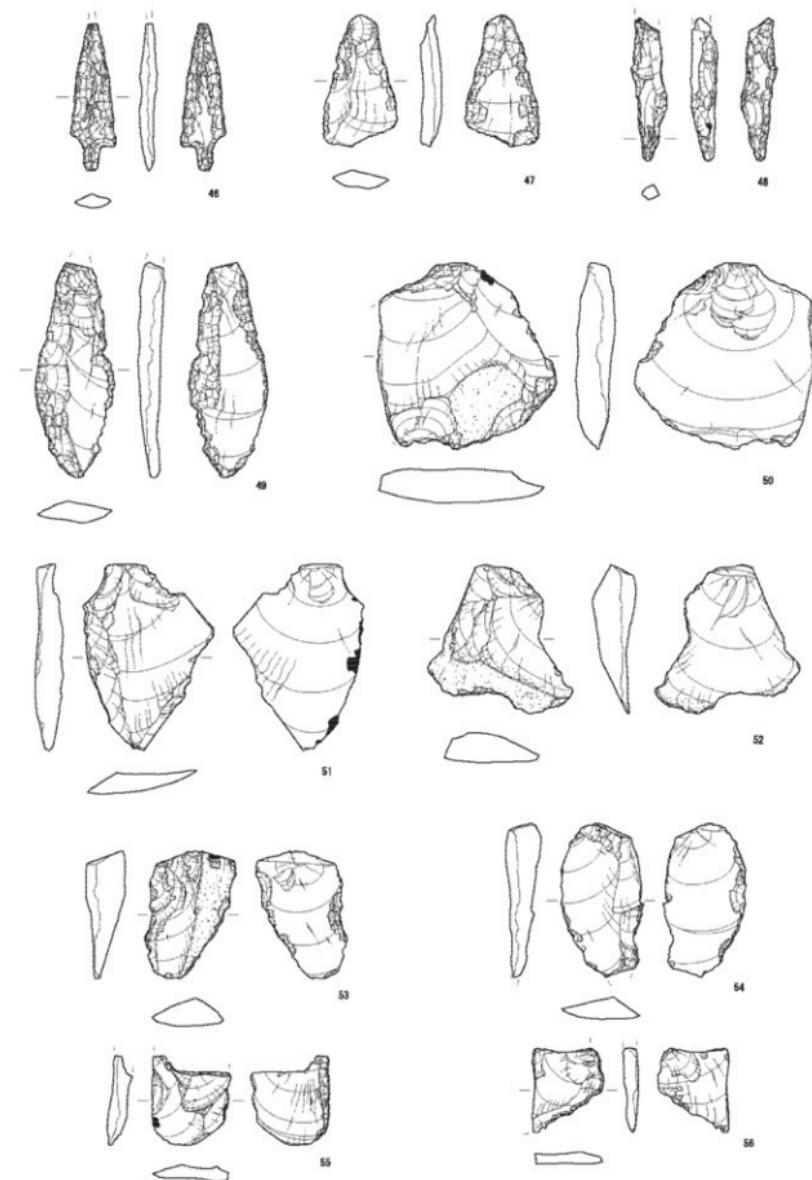
SD 3 (34)



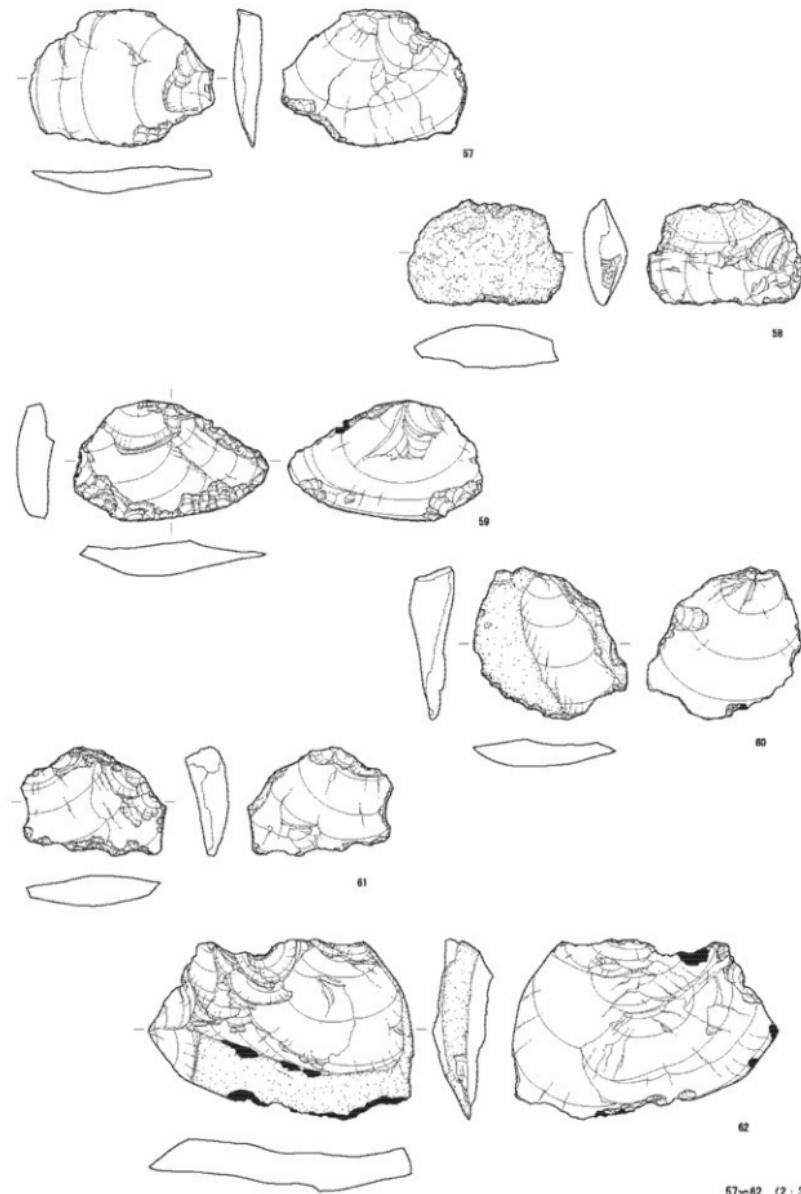
包含層 (35~65)

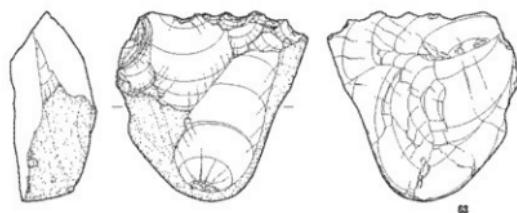


26・27・31・33 (2:3) 28-30, 34-45 (1:3)

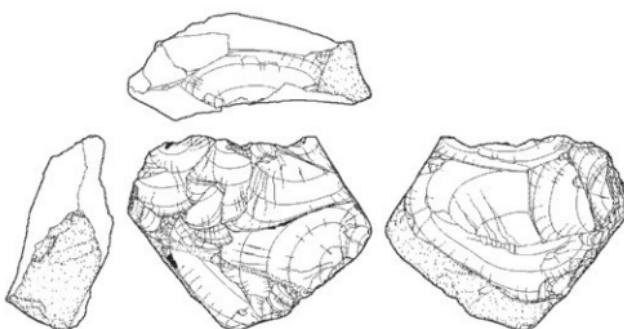


46-49 (4:5) 50-56 (2:3)

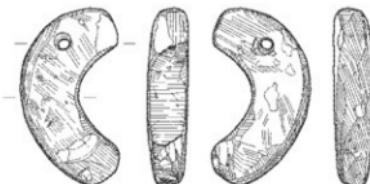




63



64



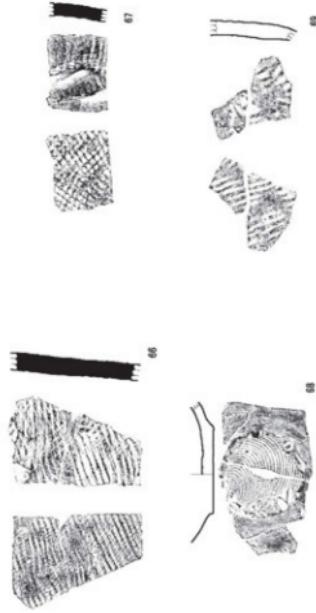
65

63 (2:3) 64 (1:2) 65 (4:5)

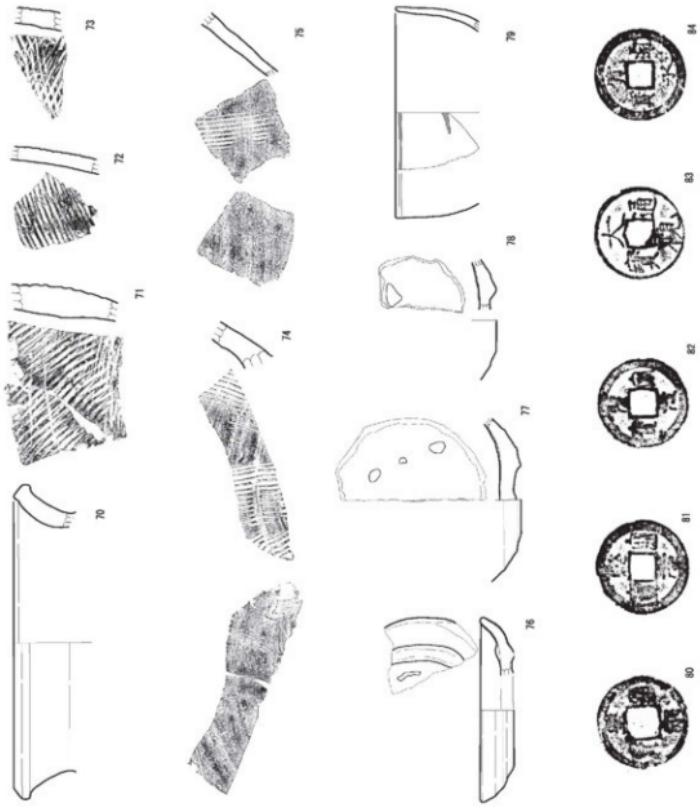
図 版13

出土遺物図⑥

古代の遺物 (66~69)



中・近世の遺物 (70~94)



66~70 (1 : 3) 80~84 (4 : 5)



遺跡遠景（対岸・小栗山集落の見晴台から）



遺跡全景（西から）



遺跡全景（北から）



遺跡全景（南から）



調査区全景（真上から）



A区北端表土剥ぎ（北から）



グリッド杭の打設（南から）



ベルコンの設置（南から）



A区造構確認作業（南から）



B区包含層の搬り下げ（東から）



P 1 の掘削（西から）



SD 1 の掘削（北から）



P 9 の掘削（北から）



SD 2の掘削（西から）



SD 3の掘削（北から）



B区水汲み作業（東から）



A区土層断面図の作成作業（東から）



B区遺物の測量（北から）



D区の精査（東から）



空中写真測量（北から）



西向き露頭でのサンプリング（北から）



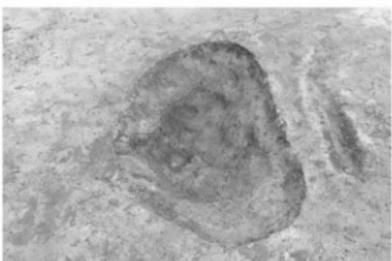
UG 1 内部覆土掘削後（南から）



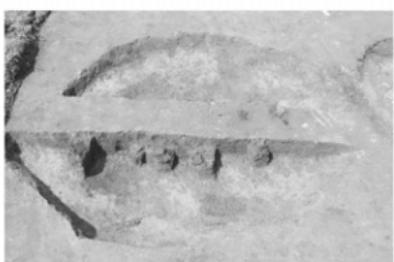
P 9 磬・土器・石鉄出土状態（北から）



SK 1 土層断面（東から）



SK 1 完掘状態（北西から）



SK 2 遺物出土状態（南から）



SK 2 完掘状態（北から）



SK 3 遺物出土状態（西から）



SK 3・P 15 完掘状態（北から）



SK 1 土層断面（東から）



P 3 半截状態（西から）



P 6 半截状態（南から）



P 11 半截状態（北西から）



P 22 遺物出土状態（北から）



P 23 完壠状態（北西から）



P 26 半截状態（北西から）



P 27 完掘状態（西から）



SD 1 西壁土層断面 (東から)



SD 1 完掘状態 (西から)



SD 2 完掘状態 (西から)



SD 2 完掘状態 (東から)



SD 3 完掘状態 (北から)



勾玉出土状態 (南東から)

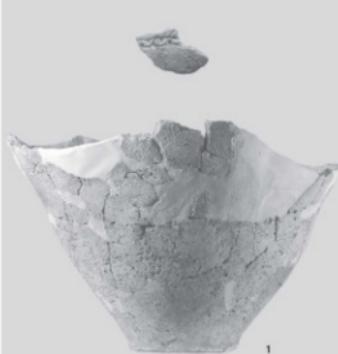


調査区西方の露頭 (西から)

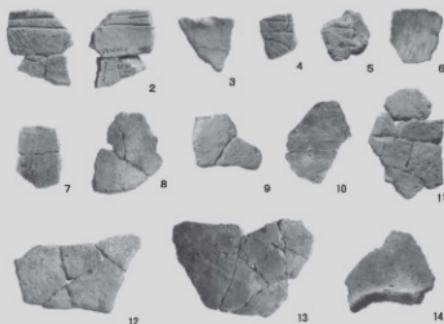


西向き露頭 (西から)

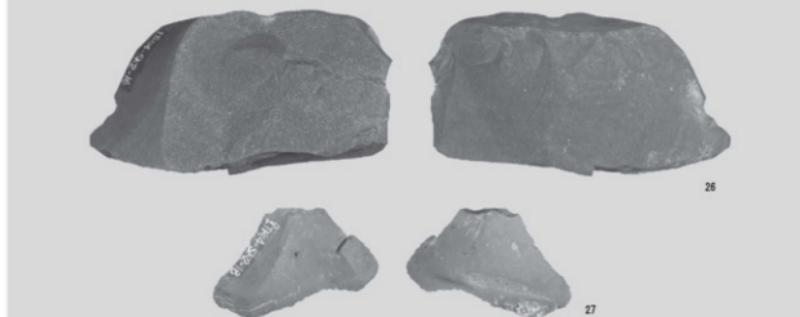
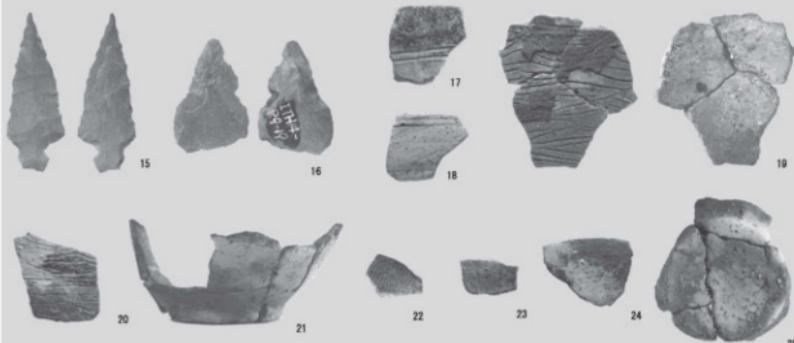
弥生時代の遺物  
埋甕  
U G 1 (1)



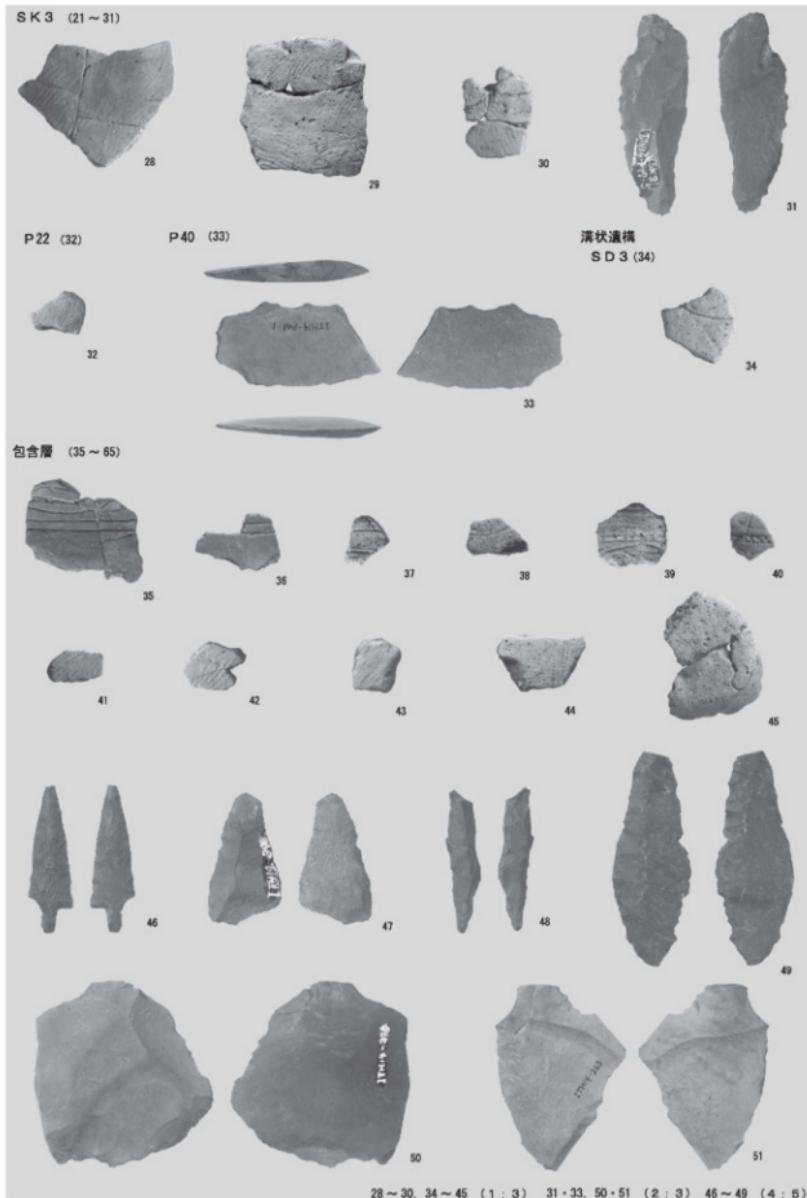
土坑  
P 9 (2 ~ 16)

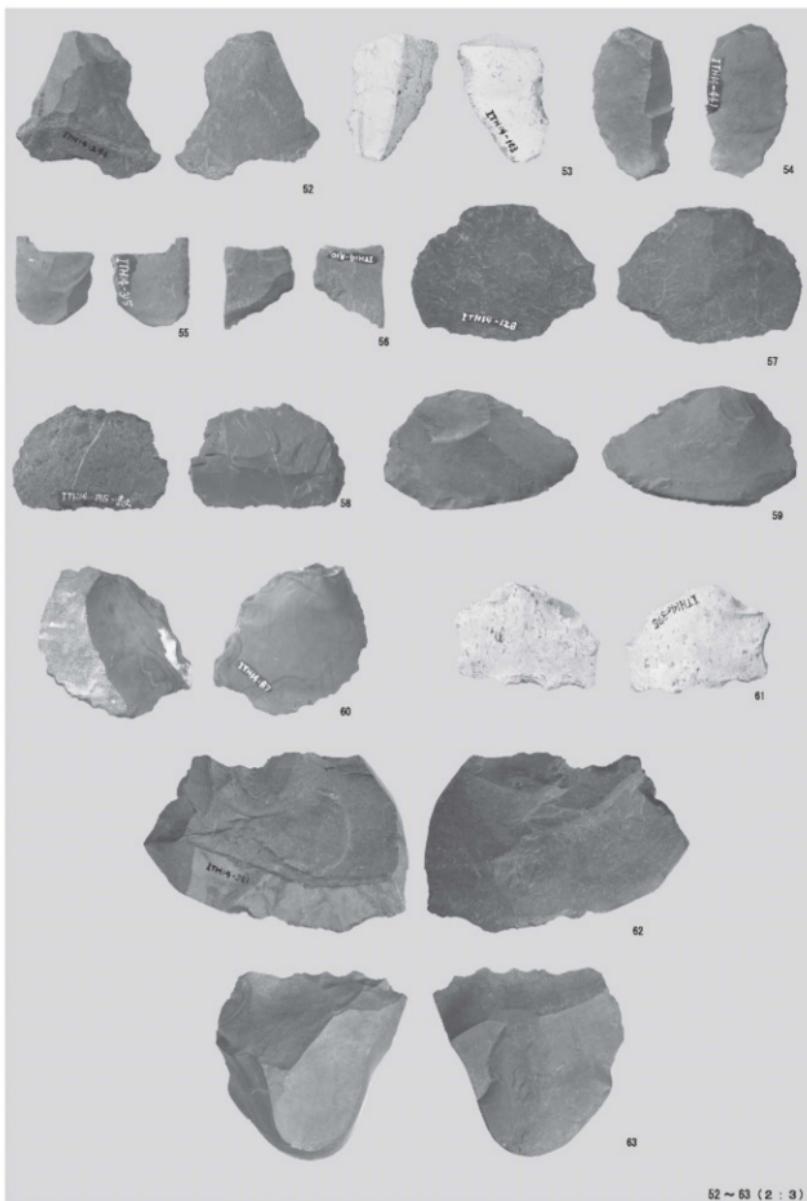


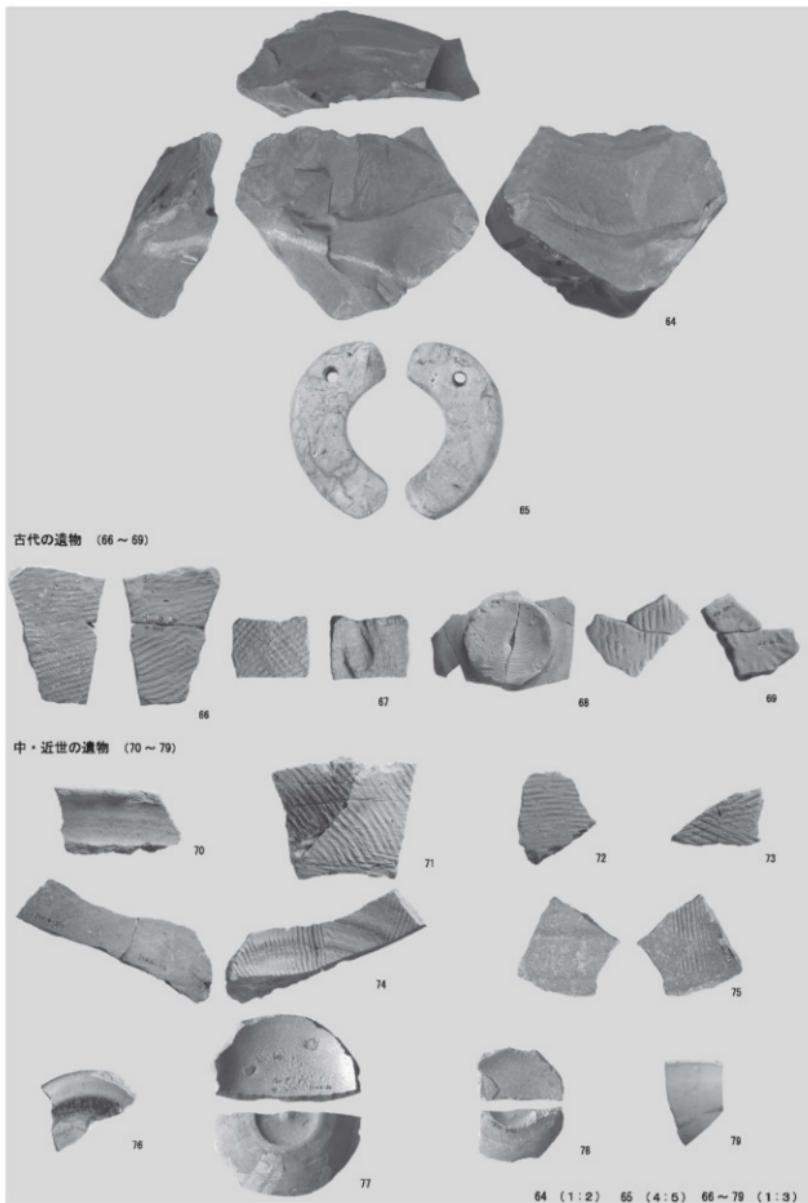
S K 2 (17 ~ 27)

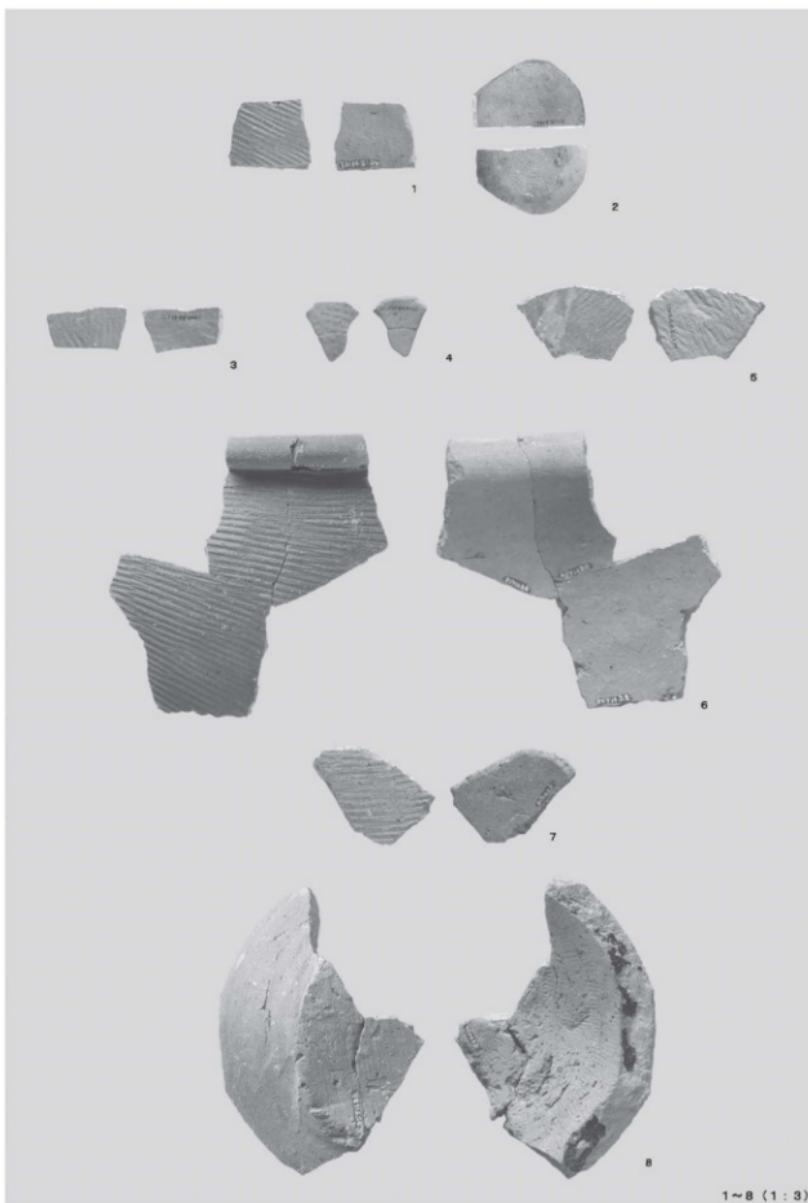


1 (1 : 4) 2 ~ 14, 17 ~ 25 (1 : 3) 15 ~ 16 (4 : 5) 26 ~ 27 (2 : 3)

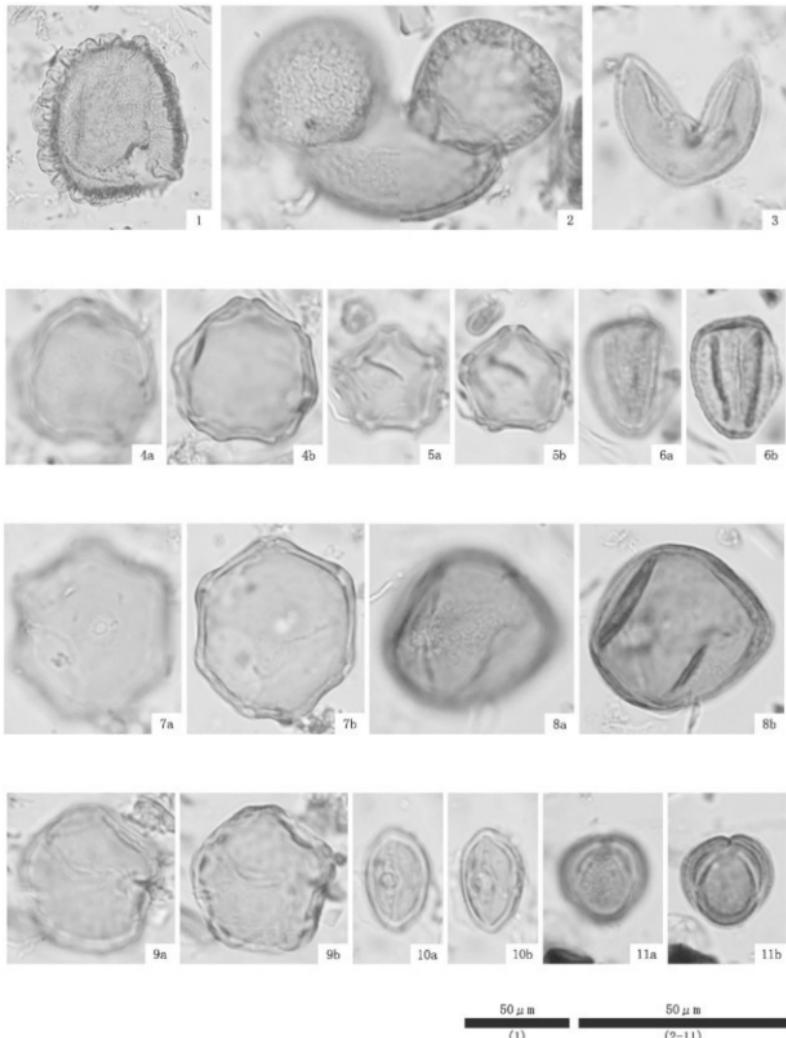




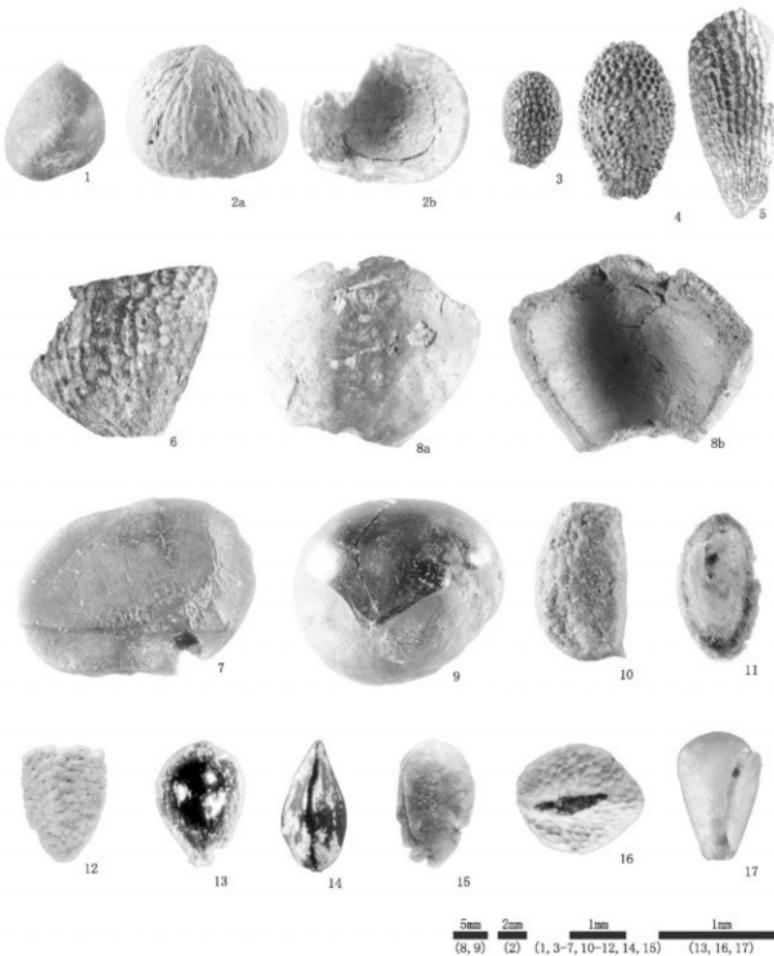




1~8 (1 : 3)

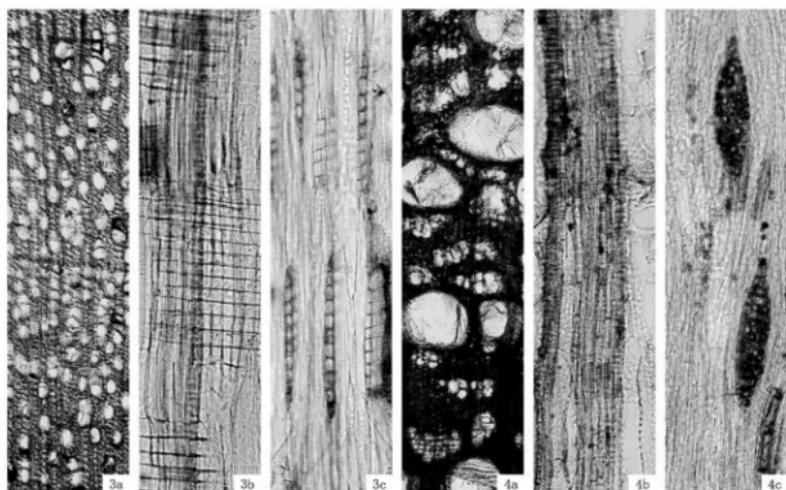


- |                         |                             |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1. ツガ属(Loc. 3;15)       | 2. マツ属(下部有機質土壤; w1付近)       |
| 3. スギ属(Loc. 3;15)       | 4. サワグルミ属(下部有機質土壤; w1付近)    |
| 5. ハンノキ属(Loc. 3;15)     | 6. コナラ属コナラ亜属(下部有機質土壤; w1付近) |
| 7. クルミ属(Loc. 3;15)      | 8. ブナ属(下部有機質土壤; w1付近)       |
| 9. ニレ属一ケヤキ属(Loc. 3;15)  | 10. トチノキ属(Loc. 3;15)        |
| 11. ヨロイ属(下部有機質土壤; w1付近) |                             |



1. クワ属 極 (Loc. 3;8)  
 3. マタタビ近似種 種子 (Loc. 3;15)  
 5. キハダ 種子 (Loc. 3;15)  
 7. ウルシ属 極 (Loc. 3;15)  
 9. トチノキ 種子 (Loc. 3;9)  
 11. ムラサキシキブ属 極 (Loc. 3;15)  
 13. ツタアケビ 種子 (Loc. 3;15)  
 15. ウド 極 (Loc. 3;15)  
 17. シロネ属 果実 (Loc. 3;15)

2. ホオノキ 種子 (Loc. 3;15)  
 4. サルナシ近似種 種子 (Loc. 3;15)  
 6. キハダ 種子 (Loc. 3;9)  
 8. トチノキ 果実 (Loc. 3;9)  
 10. タラノキ 極 (Loc. 3;15)  
 12. ニワトコ 極 (Loc. 3;15)  
 14. タデ属(3棱平滑型) 果実 (Loc. 3;15)  
 16. オカトラノオ属 果実 (Loc. 3;15)



1. クリ(w2)  
2. ニレ属(w7)  
3. トチノキ(w4)  
4. ハリギリ(w5)  
a:木口, b:柾目, c:板目

— 100  $\mu$  m:a  
— 100  $\mu$  m:b, c

## 報告書抄録

ふりがな	いわたはらいせき							
書名	岩田原遺跡							
副書名	経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	新田康則・石坂圭介							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0084 新潟県長岡市幸町2丁目1番1号 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2015年3月10日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
岩田原遺跡	新潟県長岡市小国町上岩田字岩田786番地1ほか	15021	1397	37°17'06"	138°42'18"	20140531～20140820	1030 m <sup>2</sup>	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
岩田原遺跡	遺物包含地	弥生時代 平安時代		溝・土坑		弥生土器・石器 須恵器・土師器		なし

### 岩田原遺跡

経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27(2015)年3月10日 印刷

平成27(2015)年3月10日 発行

発行 新潟県長岡市教育委員会

印刷 株式会社サンワプロセス